

「貴郎は御美男ですから、これ迄澤山の女を騙して、女のごことは何も彼も知つてらつしやいませうが、妾は貴郎に不實なぞと云はれる覚えはございません。何も彼も貴郎のために……。」

お才はさう云つてゐるうちに悲しくなつて泣き出した。

「泣け、お前は悲しいから泣くのだ、拙者に操を破られて悲しいから泣くのだらう拙者とかういふことになつたことをつひぞ喜んだことはないのだ、そちの眼の中にはいつでも怨みがある、冷たい嘲りがある。」

民彌は妙な気分のことじれから譯も分らず興奮し始めて、そんな言葉が留め度なく逆り出るのだつた。けれどもお才には民彌の言葉は一つ一つ胸に應へることばかりだつた。自分はまつたく民彌から譬へやうない大きな恩を受けたのだ。あの時民彌の救ひの手がなければ無論廓へ身を賣るより外に道はなかつた。其の事を考へたなら、民彌に對して何程感謝しても足りないのだが、お才は、心から民彌を好きになれないのだつた。

鋭敏な民彌がそれを感じないわけではないのだ。然し民彌の興奮は次第に變な方へ曲つていつた。自分の前にひれ伏して泣いてゐるお才の美しい姿を見てゐると、憤りはやがて激しい愛情に變化して行くのだつた。彼は近頃ではまつたくお才なしでは生きてゐられないやうな氣持であつた。

其の民彌の強い情熱は、いつでも其の時だけお才を夢中にさせる力があつた。二人は涙に浸るやうな抱擁を續けた。

(七)

お才は辨天橋へ行く時刻を氣にしてゐた。が、民彌はそんなことは知らない。感情が鎮静まつた後の軽い快い氣分を味はつてゐた。

「お才、そちの茶見世へ、大浦のグラバがよく来るさうだな。」

「はい、大概毎日お見えになりますわ。」



「毎日——？一體何をしに行くのだ？」

「ホホホホ、何も御用はないんでせう。只、馬に乗つたり、散歩をなさつたりするついでにお寄りになるだけですわ。」

「グラバはお前に惚れてゐるのだ。」

「まあ、そんなことがあるものですか。」

「いや、確かにさうだ。グラバがお前に思召しがあるといふことは、土佐商會の後藤さん達も知つて居るさうだ、近藤がさう云つてゐた。」

「まあ、厭な事。お才は眉の間を擧めた。」

「はゝゝゝ、異人だつて何も嫌ふことはない、殊にグラバは立派な人物だ。」

「どんな偉い人でも、異人なんか眞つ平御免ですよ。」

お才は憤つたやうに云つた。

其處へ仲居がやつて來て、

「ふう様、貴郎にお目に掛りたいといふ方がお見えになりましたが。」

「どんな人間だ？」

「浪人らしいお侍が二人で御座います。」

「そんな者に會ふ必要はない、居ないと云つて追ひ返すがよい。」

「さう申しましたところが、居ることはちゃんと承知して來たから、面會するまでは動かぬと云つて頑張つてゐるんで御座いますよ。」

民彌は不愉快な顔をした。

「何んと云つても會はんと云へ。」

と民彌が呶鳴つた時、其の入口の處から、

「いや是非共會ふ。」

と云つて二人の浪人はツカ／＼座敷へ入つて來た。

「おはん達は何れの仁、他人の宴席へ無斷で踏み込むとは無禮で御座らう。」



「無斷ではない、我々は執次ぎをさせて参つた。斯く居り乍ら不在だと云ふ貴殿こそ無禮であらう。」

どつちも風體の悪い浪人だ。

(小遣錢をせびりに來たな)

こんなことには慣れてゐるから、民彌は爰で喧嘩をするのは不得策、なにがしか握らせてかへすより外はないと直ぐ決心した。

「作法を咎めてゐても仕方があるまい、して御邊達は拙者に何用あつて参られた。」

二人はどつかと並んで坐つた。そして厭におオの方をジロく眺めた。

「それ、承はらう。」

「藤岡氏、成る程聞きしに勝る尤物で御座るな、斯様な美人を引付けて浩然の氣を養はれるとは羨望の至りでござる、わツはツは。」

「詰まらぬことを申さずと、用件を演べられえ。」

「勿論、金子を少々借りに参つた。」

民彌は不承々々乍ら懷中物を出して小判一枚紙に包んで遠くからボンと投げ出した。

「返済に及ばぬ、持つて歸られえ。」

二人はそんな物には眼も呉れなかつた。

「おい、眼違ひをするなよ。」と、一人が云つた。

「何！」

「さうぢやないか、我々は乞食ではない、一兩二兩の端た金を貰ひに來たんぢやない。」

「金高が氣に入らずば止めて歸られえ、拙者は知らぬ。」

「さうはいかぬ、貴殿はもつと澤山我々に貸してもいゝ筋がある、早い話が貴殿の此の遊興費は何處から出る？ 失禮乍ら貴殿が藩から貰つてゐる祿は何石ぢや、當方から云

つて見ようか。僅か八十石ではないか、八十石は大して茶屋酒も飲めまい、況んや千金を投じて斯ういふ美人を妾にするなどは思ひも寄らんことだ。長崎屋敷の勘定方はそ



んなに金が儲かるかな。」

「黙らつしやい、拙者の身上に就いて、他人の容喙は受けん。」

「受けんと云つてもさうはいかん、貴殿のことは大分世間の評判になつてをる。まあ藩の金を使ひ込むのは宜からうが、海援隊の近藤昶などと一緒になつて、外商と結托して武器彈藥の賣込みを周旋して、莫大の金を儲けたといふ評判もある。」

「何を云ふ。」民彌は蒼白になつた。

「評判を云ふのだ。薩摩の藩論と雖も尊攘だらう、藩論國論を無視して、異人の手先になつて金儲けをするとは怪しからんぢやないか、それでも貴殿は我々に金を貸せる筋はないと云ふのか。」

浪人は大聲を擧げて喚き立てた。民彌は憤りと屈辱のためにワナ／＼體を顫はせた。

「若し此の事を我々が吹聴して歩けば、貴殿の一身は立どころに滅亡だ、のう藤岡氏、だから餘りお坊ちゃん振りを發揮するものぢやない、相當なところで談を纏める氣はな

いか、我々と雖も元來少しも悪意はない、困窮するから貴殿の處へ頼みに來たのだ、解らんことを云ふつもりはないのだ。」

「一體、幾許貸せと云ふのだ。」民彌は慄へる聲で云つた。

「無理は云はん、一本。」浪人は人さし指を立てた。

「一本とは？」

「百兩のことぢや。」

民彌は絶望的な聲を發した。

「拙者にそんな金があるものか。」

「無いことはなからう。」

「無い——」と再び民彌は呻くやうに云つた。

餘りに民彌の口吻が悲痛だつたので、浪人は思はず四ツの眼を見合せた。  
「全く無いなら、少しは負けよう。」



『……………』

『八十兩にしよう。』

『……………』

『では、思ひ切つて半分に負けよう、五十兩出したまへ。』

『……………』

『五十兩も無いのか——然らば、ギリ／＼といふところで、三十兩。』

『……………』民彌は依然うなだれて黙り込んで居る。

浪人は呆れて了つた。

『一體幾許あると云ふんだ。』

餘程経つてから民彌は突然立ち上つて、さつきの紙入を出してそれを逆様に振つた。

すると、小判が四、五枚と、額の金が少々バラ／＼と壘の上に零れた。

『拙者の財産は之れ丈だ、之れを皆持つてつて呉れ。』

と、民彌は發狂したやうに叫んだ。

## 岐れ路

(一)

海も空も碧く澄んでゐた。大徳寺の境内には暖かい陽が當つてゐた。

鐵色のよく肥えた馬に乗つて、デコボコの坂道を走つて登つて來るのはグラバであつた。中世紀風の飾付きの乗馬服が其の體にピッタリと適つてゐた。西洋鞍に、鎧も洋式で、膝の上までくる長靴を穿いてゐる。

馬丁が後から走つて來る。勇吉といふ二十五、六の馬丁は、紺の腹掛股引の上に、黒い合羽地で作つた絆天を着てゐる。

境内へ入ると、紅葉した櫻の木の下でグラバは馬を停めた。そして馬丁に口を取らせ



竹の根の鞭を片手に持った儘ヒラリと馬から下りた。餘程方々走らせて来たものと見え、馬は汗をかいてゐた。

「勇吉さん、水をやって下さい。」と、グラバは愛馬の鼻面を撫で乍ら云つた。

「へい、畏りました。」

と答へた、勇吉は馬を櫻の木に繋いだ。そしていつもするやうにお才の店へ水を貰ひに行つた。

「お才ちゃん、今日は。」

奥の方で餅を焼いてゐて気が付かなかつたお才は、其の時始めて振り返つた。

「おや勇吉さん、入らつしやい。」と、につこりと笑つて愛嬌よく答へた。

「好いお天気ですね。」

「ほんとに、好いお天気ですわ。」

「今日はね、少しばかり遠乗りをしたもんだから、馬が汗を掻いてゐるんだ。御無心で

すが、水を少々ね。」

「お安い御用ですわ、いま波んで差し上げます。」

と云つてお才は立ちかけた。

「オツ、ト、ト、ト、水はあしが勝手に汲みますよ。」

「さうですか、済みませんね。」

「何んで済まぬことがあるものか、お前さんに水まで汲んで貰つちや罰が申りやす。第一、そんなことしてゐたら、商賣物の餅が眞つ黒焦げになるぢやありませんか。」

「ホ、ホ、ホ、ほんにさうでござんすねえ。ぢや、桶は其處へ出てゐるから、勇吉さん汲んで来て下さいな。」

勇吉は桶を持つて裏の井戸の方へ行つた。お才は焼けた餅を皿の上に並べ、盆へ載せて先刻から待つてゐる田舎者らしいお客の前へ持つて行つて、

「お待たせ致しました。」と云つて差し出た。



勇吉は一杯水を張つた桶を両手で持つて馬を繋いである處へ運んで行つて飲ませた。其の時までグラバは向うの離れた石垣の崖の上に立つて、眼下の港の方の景色を眺めてゐた。それは常に見慣れてゐる景色だけれども、彼は今特にそれを美しく感じてゐるのだつた。

美しい山々に圍まれた奥深い港——東洋風な古風な町——

幼い時分に見た夢を、十年も二十年も経つてからふツと思ひ出した時のやうな、謂はれない懐かしさが、ひし／＼と胸に迫つて来る。何のことはない自分の故郷に歸つたやうな氣持であつた。それは云ふまでもなく彼が生れたイギリスのスコットランド地方の景色とは全然趣きを異にした景色であるにも係はらず、不思議にも彼は同じやうな親しみ深い愛着を感じるのだつた。

『俺はどうして此の土地がこんなに好きなんだらう。』

彼は自分の心に尋ねてみた。

『それは、あの娘がゐるからだ——』

耳の奥の方で何者かゞさう囁いた。グラバは魂が燃えるやうな氣持がした。桃の花片のやうな色をした皮膚と、眞つ黒い星のやうに神祕的に瞬いてる眼を彼は思ひ出した。

『俺は戀に虜はれてゐる。』

と、強く自覺した。然し、人知れず戀をしてゐる人間にとつては、幸福な時間はわづかに空想の中にだけあつて、現實は皆苦しみである。彼の場合がつまりそれであつた。彼は爰へかうして來ることが無上の楽しみであると同時に、お才を見ることは一方では譬へやうのない苦痛と懊惱の種であつた。

『旦那様、入らつしやいまし。』

グラバは、優しい聲に、空想を破られて、振り返つて見ると二、三間離れた處にお才が立つてゐた、

『今日は、お才さん。』



グラバは羅紗の帽子を取つて胸の處へ當て、丁寧に叩頭をした。お才も慌て、叩頭をして、一寸顔を紅らめたけれども、直ぐ愛想の好い調子で云つた。

「旦那様、今日はどちらの方へ遠乗りを遊ばしました？」

「私、今日は日見峠まで行きました。」

「まあ、あんな遠方まで。それでは随分お疲れでございます。」

「否、私は馬に乗ることは疲れませんが、馬だけが疲れるのです。」

お才は、異人がそんな遠く迄出歩くことが危険ではないかしらと考へたのだけれども、そんなことは云へなかつた。

「お才さんは、旅行をしたことがありますか？」

「いゝえ、妾、長崎より外へ行つたことはありません。」

「さうですか。」

とグラバは静かな聲で云つた。彼はお才のみならず日本の大部分の婦人が非常に保守

的であることを熟知してゐた。然しそれは日本の社會の制度の罪であつて、女の個性が必ずしも悪く云ふ因循姑息なのではないと思つた。

明るい太陽を浴びて立つてゐるお才の姿が、グラバには女神のやうに美しく、崇高に映じた。それは今年の春初めてお才に逢つた時分よりも遙かに爛熟した美しさだつた。漆色の髪の毛でも、衣物に包まれてゐる肉體でも、半歳の間には驚くべき成熟を遂げてゐるのだつた。女性の有らん限りの魅力が、彼女の體中に漲つてゐるやうにグラバは思つた。

「旦那様、あちらでお休みなさいませぬか。」とお才は云つた。

「有難う。」

お才は先に店の方へ戻つて來た。グラバは後から來て、毛氈を掛けてある臺に腰を掛けた。其處へお才が茶を持って行つた。丁度店には他に客はなかつた。



「お才さん、わたくし、貴女に差し上げる物があります。」

グラバはキラ／＼耀く鎖のやうな物を掌にのせてお才の方へ差し出した。

「あの、これは何でございますか？」

「これは、ダイヤモンドの首飾です。女の人が首に掛けると美しく見えますよ。」

さう云つてグラバは、其の首飾を自分の首に掛ける眞似をして見せた。それは上の方へ行く程細く、下の方へ来る程太くなつてゐる美事な黄金の鎖の輪で、其の一番太い部分からぶら下つてゐる矢張り黄金の飾の眞中に一個のダイヤモンドが嵌めてあつた。

お才はダイヤモンドといふものがどれだけ貴ばれる物だかといふことは勿論知らなかつたし、首飾のものだつて實は餘りよく解つてゐないのだが、然し一見それは容易ならぬ貴重な品物であるらしいことだけは想像されたから、彼女は辭退しようと思つて、慌

て、手を振つた。

「まあ、飛んでもない、そんな立派な物を頂く譯はございません。」

「いゝです、貴女に差し上げれば、私は一番満足です、どうか私の贈りもの受けて下さ  
501

グラバは熱心にさう云つて無理矢理お才の手に渡して了つた。お才は仕方がないから一旦手に受けたやうなもの、却つて當惑らしい顔付をして自分の掌へ移された首飾を眺めてゐた。

お才は高島以來この異人に對して或る程度の親しみを感じてゐた。それはグラバは立派な紳士であると思ふからだつた。併し、彼からこんな貴重な贈り物をされる理由は少しも解らなかつた。時々グラバが今日のやうに此の茶店へやつて來ることはあるが、それは單に自分を最眞にして呉れるのであつて、他の意味があるだらうとは受け取れないことだつた。さうした關係のグラバから、こんな品物を貰ふことは全く理由がないので



ある。

お才は困つて了つたけれども、無理に押し返すわけにもいかないので、仕方なしにそれを受け取つて禮を云つた。

グラバは直ぐ歸り掛けた。

『もうお歸りでございますか。』

『お才さん、又参りませう、左様なら。』

『有難う存じました。』

お才は店の前迄送つて出た。グラバは櫻の木の下へ行つて馬に乗つた。

『左様なら。』

『御機嫌宜しう。』

グラバは緩くり馬を歩ませて坂を下りて行つた。

お才は何気なく其の後を見送つてゐたが、やがて店の中へ入つて來ると、何時の間

來てゐたのか、民彌が裏口から入つてノツソリ立つてゐた。

『あら、民彌様、何時お出でなさいました?』

民彌は六ヶ敷い顔をしてお才を睨んでゐた。

『どうなさいました?』

『お才。』

『……………』

『今あの毛唐人と何をしてゐた?』

『何もしては居りませぬ』

『偽りを云ふな、彼奴から何か貰つたであらう。』

『あ、あれでござんすか。』お才は急いで上へ上つて、グラバが呉れた首飾を持つて來た。そして、自分はこんな物は要らないから斷つただけけれど、グラバが是非呉れると云ふので止むを得ず受け取つておいたことを民彌に話した。



民彌も暫時珍らしさうに首飾を手を取つて見てゐた。

『汝は、毛唐人からこんな物を貰つても宜いと思ふか。』

『でも、無理に下さるんですもの。』

『汝がそのやうに平常仕向けるからだ。』

『妾は、何もそんな風に仕向けたことはございません。』

『否、仕向けるのだ、それではなければこんな物を呉れる筈がない。』

民彌は嫉妬のために唇を顫はせて云つた。さう云はれるとお才も不安を感じたけれども、然し自分はある異人に對して何も仕向けた覚えはない。良心に對して疚しいことは一つもない。それなのに民彌が自分をひどく責めるのを聞いてゐるとお才も腹が立つて來た。

『呉れたのは、あの方が勝手にしたこと、妾は貴郎から叱られる覚えはございません。』

お才は美しい毗を吊り上げて横を向いて云つた。民彌はお才のさうした態度を見る

と、それが自分に對するひどい冷酷な仕打であるかのやうに感じられた。まるで此の女の心は自分から百里も遠い處へ飛んで行つて了つてゐるかのやうに思はれるのだ。

『悪性者！』民彌は罵つた。

『何んですつて、もう一度云つて御覽なさい。』

『云ふとも、貴様は性悪の賣女だ。男といふ男をたぶらかす狐だ。』

『まあ——何んといふひどいことを。』

『さうではないか、貴様は正克をたぶらかし、次に俺をたぶらかした。今度は又あの毛唐人を騙さうとするのだらう。』

民彌は留度もなく興奮して罵り續けた。嫉妬が限りもなく彼を凶暴にした。彼はお才の白いスベくした肉體をズタ／＼に斬り刻んでしまひたいくらいの衝動に驅られた。お才は民彌の顔を睨んで何か云はうとしたが言葉が出なかつた。民彌に對する強い憤りを感じると同時に、彼の無茶苦茶な言葉の中に何か動かし難い事實があるやうな氣持



がして、自分の怒りの鋒先を折られて了つた。お才は口惜しくて泣いた。

『泣け、幾らでも泣け、女の涙などは、安つぽく幾らでも出るものだわ。』

然し民彌は、泣き伏してゐるお才の姿を見てゐるうちに自然に感情が鎮まつて來た。些細なことから一圖に興奮して了つた自分の愚かしさが反省された。けれども、優しい言葉を掛けるわけにはいかないから、殊更苦しい顔をして、煙草を二三ぶく吸つたりした。

お才は柔かな肩や背に波を打たせてやゝ暫らく泣いてゐたが、やがて突如として體を起すとフラ／＼と裏口から出て行きさうになつた。

『お才、何處へ行く？』

民彌がさう呼び留めたがお才は返辭をしなかつた。裏手には深い井戸があつた『まさか。』とは思ふけれど民彌は不安に襲はれたので急いで追ひかけて行つて抱き留めた。

『何處へ行くと云ふに、これ。』

お才は幻を追ふやうな眼付をして空を見詰めてゐた。民彌は驚いて抱くやうにして家の中へ伴れ戻した。

『コレ、睨かりせい、お才——』

民彌はお才の體を揺ぶつた。お才は直ぐに意識を取り戻した。

『大丈夫か、これ。』

お才の眼には涙が乾いてゐた。

『もう何んともありません。』と案外睨かりした聲で云つたので民彌はやつと安心した。

『お才許して呉れ、あんなことを云つたのは俺が悪かつた。』

『民彌様、貴郎に悪いことはありません。』

『それでは機嫌を直して呉れたか。』

お才は返事をする代りに、愛情の燃えてゐる眼で民彌の顔を見た。民彌はお才を引き寄せて熱い接吻をした。



民彌は近頃丸山へも餘り顔を見せなかつた。一時の彼の全盛を知つてゐた者はそれを不思議に思つたが、中には當然のこのやうに云ふ人もあつた。

民彌が財政的に窮迫して來たことは、世間知らずのお才の眼にさへ分つて來た。そして民彌はひどく落ちつきがなくなつた。流石に風采だけは今でも千石取りの若殿と云つても恥かしくない容子をしてゐるが、交際つて見ると以前のやうな鷹揚さは少しもなくなつた。

それと同時に民彌のお才に對する情熱は日増しに高まつて來るばかりだつた。お才も今では知らず／＼それに惹き付けられてゐた。

彼女は、民彌を貧乏にした原因が自分にもあるかのやうな氣がして猶更彼に對する同情が昂まると共に、其の同情はやがて愛情の火に油を注ぐ結果となつた。

『お才、拙者はお前に相談があつて來たのだ。』

と、民彌は暫らく經つてから云つた。

『妾に相談とは、どんな事でござんす。』

民彌は又其處で云ひよどんでゐた。

『民彌様、どんな事でも仰しやつて下さいませ。』

『わしがこんなことを云つたら、お前は愛想を盡かすだらう。』

『何故そんなことを仰しやるんです。』

『然しお才、わしはもう武士とは云はれぬ、ヤクザな男なのだ、自分でさへ愛想を盡かしてゐるのだ。だから人が愛想を盡かすのは當り前だ。』

『人は人、妾は妾、民彌様、たとひあなたにどのやうなことがあらうと妾は何んとも思ひませぬから、何んなことでもお話し下さいませ。』

『それでは話すが、わしは藩の金を澤山費ひ込んだのだ。知つての通りわしの役は長崎



屋敷の勘定方で、金が自由になるところから、悪いと知りつゝ費ひ込んだ金が多額に上つて、もうどうすることも出来なくなつて了つたのだ。』

『一體其のお金はどれ程でございますか。』

『二千兩ばかりだ。』

『ひえツ、二千兩——？』

お才は仰天して了つた。餘りの愕きに只眼を見張つて民彌の顔を眺めた。

『驚いたらう。拙者も最初はそれ程の穴を明けるつもりではなかつたが、丸山邊りで遊び散らすうち知らず／＼深みへはまつて、到頭二千兩といふ大穴を明けて了つたのだ。處で、今迄はどうやらそれを胡魔化して來たが、近日鹿兒島から重役が御出張になると帳面を検査されるから、其の時こそわしの運命の盡きる時だ。』

『まあ、貴郎は何んといふことをなさいました。もし民彌様、それでは妾が花月から借りたのを返して下さつたあの百五十兩も、矢張りさうしたお金でございましたか。』

『勿論のことだ、小身者の拙者に何んで百五十兩といふ金があらう。』

『まあ飛んでもない——。』

お才は呆れ果てゝ、大きな吐息をした。

『それでは、一體どうするお考へでございますか。』

『それで相談があるのだ。此の儘じつとして居れば、わしは罪が露はれて、腹を切らなければならぬのだ。全くわしは腹を切らなければ申し譯がないのだ。然しお才、わしは腹を切るのには厭だ、卑怯でも何でも厭だ。それも、お前といふ者が無ければ腹も切らうが、わしはお前を置いて死にたくないのだ。』

民彌は火のやうな息を吐き乍ら云つた。お才は彼の口から出る恐ろしい言葉を豫期し乍ら、息を呑んでゐた。

『お才、わしと一緒に逃げて呉れぬか。』

『えツ。』



「驅落ちをするのだ。わしは武士を捨てる。何處の果てへ行つて、どんな生活をしようとも、汝さへあればわしは幸福なのだ。お才、拙者の頼みだ、一緒に逃げて呉れ。」

民彌は死んでもこれだけは放したくないといふやうにお才の手を握りしめて云つた。

お才はどう云つて答へたらよいか判らなかつた。

民彌と一緒に驅落をして遠い處へ行つて暮すことを考へて見ても、それはさう厭なことではなかつたが、さうなれば親達や弟をどうしたらよからう——と直ぐ考へた。現在一家を養つてゐるのは自分である。其の稼ぎ人の自分が居なくなれば一家路頭に迷ふは知れたことだ。それを考へると、民彌の云ふ言葉を易々承知するわけにはいかないやうな氣がしたが、然し目前死地に追ひ込められてゐる民彌の頼みを承かないわけにもいかなかつた。

お才はいくら考へても、どうしたらいゝか判断が付かなかつた。

「お才、何故返事をせぬ。」

「……………」

「返辭が出来ぬところを見ると厭か。」

「厭ではございません。」

「では何故返辭をせぬ。」

「民彌様、其の御返事は、どうか一日だけ待つて下さいまし。」

「一日待つてば、其の間に思案を決めるといふのか。」

「はゞ。」

「それなら一日待たう。其の代り明日までに必ず返事をするのだぞ。」

「間違ひなく御返事をいたします。」

民彌は堪へ難いやうな不安な眼付をしたが、それ以上云ふことが出来ないので承知するより外はなかつた。

(萬一お才が承知しなかつたら?)



民彌は決心した。

(此の女を殺して自分も腹を切つて死なう。)

(四)

お才はいつもより早く店を仕舞つて家へ歸つた。

「おつかさん、只今。」

「おや、お歸り。今日は少し早かつたぢやないかえ、もう少し経てばわたしが迎ひに行かうと思つてゐたのに。」

「あのネ、おつかさん、妾今日は少し氣分が悪かつたから早く仕舞つて來たんですよ。」

「おやさうかえ、さう云へば何んだか顔色がよくないやうだよ。急に涼しくなつたから風でも引いたんぢやないかしら。」

「否え、風を引いたんぢやありませんから、心配しないで宜うござんす。」

とお才は茶の間の長火鉢の側へ坐つて云つた。頭の上に神棚が祀つてあつて、壁には三味線が二挺掛つてゐる。

父親は留守だつた。兵太郎は近頃大分體の調子がよくなつて杖を突いてチヨイ／＼其處らへ出掛けるやうになつた。

お種は臺所で何かしてゐたが、フト思ひ出したことがあつて茶の間へやつて來て見ると、お才が長火鉢の縁に凭れて、物思ひに沈んでゐるやうに首埋れてゐた。

「お才、お前何か心配事でもあるんぢやないかえ。」と、お種は娘と向き合ひに坐つて、一寸顔色を曇らせて云つた。

「否え、何んにも——」

お才は顔を擧げた。

「それならいゝけれど、お前が體を悪くしたり、心配事でもあるらしいと、おつかさんは眞個に心配になるんだよ。阿父つあんはあの通り大分よくなつたが、とても以前の體



にはなるまいし、妾達はお前一人を力にして暮してゐるんだからね。」

「おつかさん、そんなこと心配しなくても大丈夫よ。妾やこの通り何んともないよ、ホホ。」

お才は蓮ツ葉な調子で云つて面白さうに笑つた。ぴんとはねた眦や締つた口許に非常な色氣があつて、親が見てさへ婀娜つぽくなつたとお種は思つた。

一人娘のお才が人の妾になつてそれで一家を支へてゐるが、旦那の藤岡民彌は誰が見ても好い男でそれに金放れもいゝ。或る意味でお才は幸福者と羨む人さへあるほどだが當のお才は常から民彌を餘り好いてゐないらしいことが、お種にとつては一つの疑問だつた。

(あんな好い男なのに、何處が氣に入らんのだらう?)

とお種は思つた。勿論他に浮名など立てられたことは一度だつてあるわけではないから、お種にとつてはそれが不可解だつた。女の秘密は親娘の仲でも解らないのだ。

「さうく、肝腎のことを話すのを忘れてゐたよ。先刻大浦のお慶さんといふ人から使が来て、何か話したいことがあるから、今夜閑があつたら来て貰ひ度い、といふ言傳だつたが、お前のお慶さんを知つてるのかえ。」

とお種は娘の顔を見乍ら云つた。

「まあ、お慶さんから——」

お才もそれは意外だつた。お慶さんには今年の春河野正克を隠匿つて貰はうとして訪ねて行つた、あの時以來一度も會つたことはないのだつた。其のお慶さんから突然呼びに来るとはどういふ用事なんだらう? と考へて見ても見當が付かなかつた。

「おつかさん、何んと云つて御返事をしておいたの?」

「わたしにや、どう云つていゝか分らないからね、お才が歸りましたらさう申しますと云つておいたよ。」

「さう、ぢやあ今夜妾行つて来よう。」



とお才は急に明るく顔になつて云つた。お慶さんの用事はどんな事だか分らないが、あの派手な生活を見たり、男のやうな開けつ放しの性格のお慶さんに會ふことを考へると、差し當りの此の苦惱から一時でも遁れることが出来さうな氣持がしてお才は何だか救はれたやうな氣分になるのだつた。

お才は直ぐに身じまひをして、自分だけ先に夕飯を食べて家を出た。漸う日の暮れ方であつた。銅座川について少し下つた處で新地橋を渡つて、新地と呼ばれてゐる唐人町を通り抜けた。元爰は清商の荷倉のあつた處だが、現在では其處にいろんな支那人の店舗が出来て繁昌してゐた。一軒の料理屋の二階からは、胡弓に合せて支那の芝居歌を歌つてゐるのが聞えた。

辨天橋の邊へ行つた時分には殆んど暗くなつてゐた。其の橋は海から僅か半丁餘遡つた處に架つてゐた。川には上げ汐が満ちてビチ／＼石垣をしやぶつてゐた。

お才は、先達ての晩のことを思ひ出した。あの時は玉川であんな事件が突發して民彌

がひどく興奮して了つたゝめに、お才は途中からぬけて來ようと思つても民彌がどうしても離さないで、到頭傳吉といふ男と交した約束を果すことが出来なかつた。

『正克様も傳吉さんとやらもきつと憤つてゐるだらう。』

と思ふとお才は、あの晩は全く氣が氣ではなかつたが、あゝした惨めな目に遇つてゐる民彌に對しても實際同情しないわけにはいかなかつた。全體民彌といふ男が、金びらを切つて大盡風を吹かせてゐる時にはひどく反感を抱いたが、あゝした醜態を演じたり最近のやうに落ち目になつて遺憾なく弱點を曝露するやうになつてから、お才は初めて民彌の眞實に觸れたやうな氣持がして、眞個の愛情を感じるやうになつたのだ。今でも正克のことを忘れてゐるわけではないが、

(正克様と自分とは所詮縁が無いのだらう。)

と思つて見たりするやうになつた。それは悲しい諦めでもあつた。と同時に、民彌に身を任せて居り乍ら、正克にも會はうとする自分の行ひが我乍らあさましい事に思はれ



て来たことも事實だつた。

お才は、明日民彌にどう返事をしようかと考へ乍ら歩いてゐた。

(もうかうなつた以上は、あの人に従ふのが女の道だ。)

と、漸う最後の決心が付いた。親のことはともかくも、民彌にくつ付いて何處へでも逃げて行かうと決心した。さうするとお才は急に心が軽くなつた。今までの煩悶がカラリとなくなつて、足の運びも軽くなつた。

お慶さんの家が直ぐ側にあつた。

(五)

縁から、美しい刺繍を施した布が掛けてある方形のテーブルの上には、いろんな料理が並べ立てゝあつた。料理を盛る器は、南京焼の皿や、青磁の鉢や、赤繪の井などの類で日本の料理みたいだに漆器は使つてなかつた。

人々は其の料理を、長い象牙の箸で挟んで食べたり、可愛らしい南京焼の匙で湯をすくうて啜つたりした。一人々々の前にギヤマンの小盃が二つ三つ宛置かれて、それには紅い葡萄酒や、水のやうに透明なウイスキーや、又は黄色い支那の老酒が注がれてゐる。

燈籠のやうな、切子玻璃の房が重れてゐる洋燈が天井から鎖で吊されてゐて、日本人が未だ嘗て知らなかつた處の眩しい程明るい燈火が部屋の中を煌々と照らしてゐる。

卓には、主客三人が椅子を引き寄せてついてゐた。お慶さんは、黒い絹へ美しいレースの飾を附けた西洋の服を着て、大きなルビーの入つた首飾を掛け、兩方の手首に龍の彫刻をした黄金の腕輪をはめてゐた。

お慶さんの少し肥り過ぎてゐる張り切つた體全體にアルコールが廻つて、血液が躍動してゐるやうに見えた。お慶さんは自分の右手に腰掛けて長い箸で豚の揚げ肉を挟まうとしてゐるグラバに向つて、



『ねえグラバさん、あなた一體いつからあの娘を御存じなんですか。』

と云つた。もう一人お慶さんの眞向うにゐるのはミスといふ英國人で、グラバ商會の社員だつた。年齢もグラバよりは二つ三つ若かつた。

『今年の春でした。私が土佐の後藤さんを案内して高島へ行く時、あの婦人と船で乗り合せたのです。そればかりでなく、高島でも會ひました。』

とグラバは肉を食べかけたのを止めて話した。

『では、あの火事のあつた時ですね。』

『え、さうでした。』

(さうすると、風頭山事件の若い武士を隠匿つて呉れと云つてお才が爰へ来たことがあつたが、あれから間もなくだつた。)

と、お慶は腹の中で考へた。風頭山事件と云へば、あの下手人はあれつきり捕まつた話も聞かぬが、一體何處へ逃げたんだらう——とお慶はそんなことも思ひ出してゐた。

お慶はあの時二度位お才に會つて、美しい娘であることは知つてゐるが、まだ何處となく子供じみたお才を、グラバがこれ程大騒ぎをするのが腹の中では可笑しくて堪らなかつた。然し、何はともあれお才をグラバに周旋して、彼の熱望を遂げさせてやることは、お慶としては直接間接に利益の伴ふことでもあるし、同時に此の種の事業は彼女の義務でもあつた。

『お慶さん、お才さんは今夜爰へ来るでせうか。』

とグラバは不安な眼をして云つた。

『來ますとも、きつと來ますよ。』

お慶は確信を持つたやうに云つたが、直ぐに狡猾な笑ひを眼許に浮かべて、

『然しグラバさん、わたしの骨折でお才ちゃんを貴郎のものにすることが出来たら、其の時はわたしに對してどんな報酬をして下さいますか?』

『わたくし、どんな報酬でも差し上げます。』



『では、妾から要求しても宜ろしうございますか。』

『それは當然貴女の権利です。』

『有難う、では日本人を一人、あなたの船で英國へ送つて下さいませんか。』

グラバは暫時考へてゐたが、

『其の日本人は何んといふ人ですか？』

『紀州人で、陸奥陽之助といふ人ですが、現在海援隊に入つて居るんです。』

『何んの目的でイギリスへ行かうといふんですか。』

『日本に居ては生命が危くなつたから、イギリスへ逃げて行つて、彼地で學問をしようといふんです。』

『宜ろしい、それは確かに私が引受けました。が、お才さんの方は大丈夫でせうね。』

『ホ、ホ、ホ、グラバさん、妾が眼を付けた娘で、成功しなかつた例があると思ひますか。』

『あなたの手腕を私は信頼してゐます。けれども、お才さんには戀人があるでせう。』

『戀人といふと？』

『それ、あの藤岡とかいふ……。』

『あの、藤岡のことですか、それならグラバさん御心配には及びません、十人の藤岡が附いてゐても、妾が奪らうと思へば、何んでもないんですもの。』

お慶はウイスキーをぐつと煽つて誇らしげに云つた。

其の時小間使がこの部屋へ入つて來た。

『アノ奥様、お才さんと仰しやる方がお見えになりました。』

『おや、さうかい。ぢや、應接間の方へお通しして置くがいゝよ。』

『畏りました。』

と、小間使は出て行つた。



お才が通された部屋は洋風の應接室で、其處には立派なテーブルや椅子が置いてあつて、ガラス破りの窓には紅い緞子のカーテンが垂れ、卓上に銀製の据洋燈が置いてあつた。お才はそんな處へ入つたのは初めてだから腰も卸さず隅の方に立つてゐると直ぐお慶さんが入つて來た。

『まあお才ちゃん、よく來て下さいましたね、さあ〜此の椅子にお掛けなさい。』

『あの、いつぞやは大變御心配を掛けまして……。』

『ほんとに、あの時は、飛んだ手違ひになつてお氣の毒でしたね、そしてあの河野さんとかいふ方は何處にいらつしやるんだか、お才ちゃん御存じですか。』

『否え……ちつとも存じません。』

『若い人はとかく血氣に逸つて、一生取り返しの付かぬことをしたがるものですよ。あの方だつて、あんなことさへなければ、お國のためになる人でせうに。』

と、お慶さんはしんみりと云つた。漸くお才も椅子に腰を掛けた。お慶さんも向き合

ひに腰を掛け、ランプの光でお才の方を見乍ら、

(此の娘は、何んともまあ美しくなつたことだらう、これではグラバさんが逆上せるのも無理はない。)

と、腹の中で思つた。

『お才ちゃん、忙がしい處をお呼び立てして済みませんでした。』

『いゝえ。』

『他でもないんですがね。あなた、グラバさんを御存じでせう。あの方から妾は頼まれたことですが、今度長崎へイギリスの公使様がお出でになるのです。もう公使様は軍艦で江戸をお發ちになつたさうだから、二三日中にはお着きになるかも知れないのです。それでグラバさんのお宅で、公使様をお招きして御馳走をするのだから、其の時あなたにお取持ちに來て貰ひ度いといふグラバさんのお頼みなんですがね、どうか引受けてやつて下さいませよ。』



『でも、妾なぞが……。』

『否え、是非共お才ちゃんを頼み度い、他にも手傳ひに来る人があるが、お才ちゃんのやうな美しい人を見せて、長崎にもこんな美人があると、鼻を高くしようといふグラバさんの腹なんですよ。』

『まあ！』

お才は紅くなつた。

『只それだけのことで、別にむづかしいことをお頼みするわけぢやありませんから、是非共承知してやつて下さいな。これあ妾からお願ひするんですからね。』

とお慶さんは厭とは云はせないやうな調子で云つた。お才は困つたけれども、相手は何しろ女では長崎切つての勢力家と云はれてゐるお慶さんの依頼ではあるし、グラバにも最負になつてゐるから、一がいに斷ることも出来なかつた。

『でも妾は、異人さんのお相手などはしたことがございませぬから。』

『なあにお才ちゃん、そんなことは妾が教へて上げるから何んでもありませんよ。それからね。其のことでグラバさんが先刻から家へ来て入らつしやるから、一寸會つて行つて下さいな。』

と云つて、お慶さんは呼鈴を鳴らして小間使を呼んで、グラバを其處へ案内するやうに云ひ付けた。

グラバは白羅紗のズボンに、燕尾服を着て、瀟洒な襟飾を結んでゐた。入口の扉を開けて一歩中へ入つて、お才と顔を見合せた。

『グラバさん、満更知らぬ仲ではなし、どうぞ御遠慮なく。』

お慶さんは、自分とお才との間の空いてゐる椅子の方へ手を差し出して云つた。

『お才さん、今晚は。』

お才は起つてお辭儀をしたが、何んとなく極りが悪くて顔が火照るやうな氣がした。

『あの事は、お才ちゃんに妾からすつかり頼みましたから御安心なさいまし。』



『お才さんは、承知して下さいましたか。』

『それあ、妾の頼みですもの、承いて呉れますとも、ねえお才ちゃん。』

お慶さんは太い蛇のやうな腕をテーブルの上に投げ出して、俯向いてゐるお才の顔を覗き込み乍ら云つた。お才は何んといつて答へていゝか分らないので黙つてゐた。するとお慶さんは、グラバ氏の邸宅がどんなに立派だかといふことや、公使の招待會がどんなに盛大であらうかといふことを話し出した。

『お才ちゃんも、一度は見ておいたはうがいゝんですよ。大體日本の女は引つ込み思案で駄目さ。御覽、いまに日本が開けて来れば女だつてドシ／＼出歩くやうになるから。外國人を異人さんなんて云つて毛嫌ひしてゐては日本の國はエラクなれないですよ。』と、お慶さんは氣焰を吐いた。

お才は、異人館などへ手傳ひに行くことは何んだか恐ろしい氣もするが、お慶さんの話を聞いてゐると一種の好奇心も湧いた。相手はグラバといふ立派な紳士だから間違ひ

はないやうなものだが、それにしても異人屋敷へ出入りをしたことが世間へ知れたら、人から誤解を受けないとも限らない。就中このことが民彌に分れば、彼はきつと怒るに違ひない。民彌に相談すれば、彼は許さないに決つてゐる。

『今日だつてグラバさんが首飾を呉れたことであんなに怒つたくらぬだから——』  
其の民彌に内密でグラバの邸へ行く。單に宴會の手傳ひに行くのだとしてもそれは何となく後めたいことだつた。

『わたしはあの人と駈落ちまでしようとしてゐるのに、あの人に隠してそんなことをしてはよくない——』

と、いろ／＼に考へると、どうしても此のことは斷つたはうがいゝと思はれて来たが然し、此の場で斷つたところでお慶さんが承知する筈はないから、一先づ承諾した體にしておいても、其の時になれば何んとかいふ逃げ口上もあるだらう、とお才は思つた。

『グラバさん、折角お才ちゃんが来て呉れたんですから、何かお話しをなさいませよ。』



お慶さんは擲揄ふやうな眼付をして云つた。然しグラバも殆んど無言だつた。其の代り彼は今夜ほどよくお才を見たことはなかつた。彼は、お才の體のどんな小さな一部分に對しても飛び付きたいほどの魅力を感じた。一寸觸つたら滑つて了ひさうな、頬だの首筋を眺め乍ら彼は考へた。

『日本の女はどうしてこんなに美しい皮膚を持つてゐるのだらう。』

間もなくお才は暇を告げてお慶さんの家を出た。人を附けて送るといふのを斷つて提灯を借りて戻つて來ると、お慶さんの家から僅かに半丁ばかり川端を歩いて來た時、後の方からバタバタと人が驅けて來たから、急いで道を除けてゐると、一人の男が逃げて行くのを、もう一人の男が追つかけて行くのだつた。走つてゐるからよく分らなかつたが、先に走つて行つた男はどうやら先日大徳寺のお才の店へ來た播州の傳吉らしく追つて行つた方は目明しの音藏らしかつた。やがて後の男は先の男に追ひ付いて、二人は往來でとつ組み合ひを始めた。暫くの間上になり下になりして組み合つてゐたが、

段々川岸の方へ轉がつて行つたかと思ふと最後に、

『あつ!』

と思ふ間に、二人は組み合つた儘川の中へドブーンと落ちて了つた。

(七)

長崎の町は非常に活氣づいてゐた。

それは英國の東洋艦隊が入港したからだつた。クーパー提督の引率する八隻の英國軍艦は、威容堂々として港の中央に投錨してゐた。外國船を見慣れてゐる長崎の市民でも其の立派な艦隊を間近に見ると眼を時てすにはゐられなかつた。

海岸には、軍艦見物の群衆が朝から晩まで絶えずガヤ／＼云つて集つてゐた。軍艦からはボートを卸し、水兵や士官を零れるほど満載して岸の方へ漕いで來た。それらの水兵達は上陸すると三々伍々連れ立つて市中を歩いてゐる。



市中全體人出が多いので、お才の店も平常より客が多かつた。来る客も来る客もイギリスの軍艦の話をしてゐる。今も二、三名の客が、山の上から堂々たる其の艦隊を眺めて同じやうな話を始めた。

「何しろ大したものですね。あんな大きな軍艦が八艘も揃つてやつて来ちやあ、いくら日本人が強くても戦争は出来ませんよ。」

「私あさる物識りに聞きましたかね、イギリスといふ國は世界一の海軍國で、本國へ行きやあんな軍艦は笹ツ葉で作つた船みたいなもんで、もつとあの何倍も大きな奴が幾百艘でも浮かべてあつて、いざ戦争となるとそいつがどつと出て来るといふ話ですよ。」

「あれより大きな船ぢやあ山でさあ。」

「其の山程のやつが来るんださうですよ。」

「桑原々々、私あ戦争と雷と南瓜の煮たのが嫌ひでしてね。」

「戦争と南瓜と一緒にする奴があるもんか、處で一體、イギリスの軍艦がこんなに澤山

長崎へやつて来たには何か理由があるんでせうね。」

「それはお前さん、生やさしい金を費つて来ちやあぬないんだから、理由は大有り名古屋さ。」

「一體どういふわけなんですか。」

「何んでもあの軍艦にイギリスの公使のパークスといふ人が乗つてるんださうだ。其のパークスが長崎へ談判に来たんださうですよ。」

「へえ——」

「江戸で談判をしても埒があかんもんだから、パークスが業を煮やして、カン／＼に怒つて、それで軍艦へ乗つてやつて来たんださうだ。」

「へえ、何でパークスがそんなに怒つたんですかね？」

「私も詳しいことは知らんが、いろ／＼六ヶ敷いことがあるんでせうな、長崎奉行だけぢや話しが出来ないといふので、幕府の方から、外國奉行平山圖書頭様、大目附戸川伊



豆守様、お二方揃つて態々長崎へ御出張になつたくらゐだから、生優しいことぢやありませんか？』

『私が聞いた話ぢや、今年の春風頭山でイギリスの水兵が殺されたでせう。處があの下手人がまだ捕まらないのでパークスが大變怒つて、直接に長崎へ掛け合ひに来たんだといふことですよ。』

『お役人衆はどう答へるでせうな？』

『どうつてお前さん、人を殺したんだから、下手人を捕へて渡すより外に仕方はありません。』

『水兵の一人や二人殺されたつて何もそんなに嚴ましく云はなくても宜ささうに思ひますかねえ。』

『處が、西洋の國ぢや天子様でも乞食でもみんな同じ人間だつて云ふんださうぢやありませんか。』

『そんなベラボーな話があるもんか、それぢやあこちとらだつて公方様だつて同じ人間だつて理窟になるぢやないか、どうも話が解らないね。』

『話の解らないところが詰り毛唐人でさあね。』

『成る程ねえ、處變れば品變るといふのは此の事ですな。ヤレ／＼、長話しに夢中になつて大變暇を潰して了つた。私あまだこれからお華客を一廻りしなけりやならないからお先へ御免蒙ります。』

『私共も用があるんだつて、モシお才ちゃん、爰へ茶代を置きますぜ。』

『有難う存じます、又入らつしやいませ。』

『お才ちゃんのお世辭につられて、焼餅を食ひに来るはいゝが、あんまり繁々来ると、今度は家で婢アが焼餅を焼くんでね。』

『ハハハハ、これあ飛んだ焼餅の食ひ合せだ。』

『ホホホホ。』



お才は客の歸つたあとを片付け乍ら、今も噂に上つた、河野正克のことを考へさせられた。

(妾のために正克様はあんなことになつたのだ、妾はどうしても正克様を助けなければ申譯がないのに、お金の爲とは云ひ乍ら今では民彌様の持物になつて了つた。)

而も民彌に誘はれて駈落ちをする約束までして了つた。もうさうなれば愈々正克と自分との縁は切れてしまふのだと思ふと、正克に對して申譯がないばかりか、知らぬ他國へ漂泊つて行く自分の運命が悲しくもあつた。

お才は港の方を眺め乍ら、

(もう此の土地にゐるのも長くはない。)

と思つた。

其處へ一人の男がやつて來た。

「私は大浦のお慶様からお使に參りました。先日お約束をした事で今晚是非お出でを願

ひたいと、かういふお言傳で御座います。』

お才はあの晩の約束を思ひ出した。今の自分としてはそんな處へ顔を出す氣持は毛頭ないけれども、一旦約束したことを理由なく破ることも出来ないし、

(困つた。)

と思つた。然し、其の時お才は、ふと胸に浮かんだことがあつた。

「正克様のことを、お慶さんに頼んで置かう。』

と考へた。これは確かに名案だと思つた。正克の居所が判らないから以前のやうにお慶さんに隠匿つて貰ふことを頼むのではないが、外人に對して勢力のあるお慶さんに裏面から運動して貰つたなら、あの問題も多少緩和して、犯人に對する追求が緩やかになるかも知れないと考へたのだ。

お才は、何故今まで爰に氣が付かなかつたのだらうと後悔した。

(妾から頼めば、義侠心の強いお慶さんのことだからきつと承いて呉れるだらう。さう



なれば妾も心残りなく長崎の土地を去ることが出来るといふものだ。

それには今夜お慶さんに會つて、くれぐれも頼み込んでおくことが必要である。

お才は決心した。

『それは御苦勞様でございました。それでは屹度伺ひますと、お慶様に申し上げて下さいますし。』

と使の者に答へた。使は直ぐ歸つて行つた。

お才は、生れて初めての晴れがましい場所へ行くのだから、早く家へ歸つて、髪など結つて置かなければなるまいと思つたから、店を仕舞ひかけてゐる處へ、裏の方から、ひよつこりと民彌が入つて來た。

『あら、民彌様。』と聲を掛けると、民彌は、『しッ。』と云つて手を振つた。

民彌はこの二、三日の間にまつたく別人のやうに人相が變つて了つた。眼がくぼみ、頬がこけ、顔色は蒼ざめ、見る影もないほど憔悴し切つてゐた。

彼はよろ／＼として上へ上ると、倒れるやうに坐つた。

『民彌様、どうかなさいましたか？』

お才は側へ摺り寄つて訊いた。

『否、何んともないから、心配するな。』

『でもお顔の色が大層——。』

『顔の色も悪からう、俺は此の頃は、まるで地獄へ墮ちたやうな氣持で暮らしてゐるのだからな。時にお才、今夜いよく逃げるのだぞ。』

『えッ、今夜——？』

『さうだ、今夜逃げるのだ。俺はお前を伴れて遠くへ逃げてでも困らぬやうにお上の金を三百兩盗み出して爰に持つてゐる。』

『貴郎——。』お才は話をきいたばかりでワナ／＼顫へ出した。

『金がなくては、何處へ行かうと身が立たぬわ。だから又金を盗み出したが、もう一日



も延してはゐられぬ、愚圖々々してゐると俺の首が飛んで了ふから、今夜のうちに長崎を發たなければならぬ。だから、そちも早く支度をして呉れ。」

お才は胸がドキ／＼して急に返辭さへ出なかつた。

『お才、何故黙つてゐる、汝は心變りでもしたのか。』

民彌は血走つた眼を据ゑて云つた。

『否え、心變りなどはいたしません。』

『それなら宜し。今夜、五ツ半を合圖に、茂木道にある俵屋地藏な、後處迄來てくれ、拙者は少し早く行つて待つてゐるからな。』

『はい……。』

『今夜のうちに茂木迄出て置くのだ。そして、あすの朝の早い船に乗つて熊本の方へ逃げるつもりだ。熊本には俺の知人もあるから、當分あの邊に隠れてゐて、折を見て上方へでも上つて了へば、最早心配することは無い。』

『途中で追手に捕まるやうなことはないでせうか。』

『そんなへマはせぬから安心しろ。』

と民彌は云ふけれども、お才は安心どころではなかつた。

(恐ろしいことになつてしまつた。)

と思ふけれども、今更どうすることも出来ない。民彌と運命を共にするより外に仕方がない——。

愈々さう事が決つた以上、お才は一刻も早く家へ歸つて、よそ乍ら兩親や弟に別れをしたいと思つた。年取つた親達や、幼い弟に今日限り別れて會へないのだと思ふと悲しみがこみ上げて來た。

『民彌様、それでは妾は直ぐ家へ歸ります。』

『さうして呉れ。然し、約束を違へまいぞ。』

『大丈夫でございます。』



『五ツ半に依屋地藏へ来るのだぞ。』

『はい、分りました。』

民彌は幾度も念を押して、人目を避けて裏口から出て行つた。

其の後からお才も店を出て、山を下つて我家へ歸つて來た。

『おやお才、今日は大層早かつたねえ?』と母親は云つた。

『お母さん、妾けふは何んだか遊びたくなつたから、早く歸つて來ましたよ。』

とお才はわざと元氣よく見せて答へた。

『さうかい、ほんとに偶には休んで家でゆつくり遊ぶがいゝとも。何しろお前、イギリスの軍艦が澤山入港つてるので、濱の町邊は大變賑やかだといふから、後で嘉太郎でも伴れて遊びに行つて來るといゝよ。』

『阿母さん、お父つあんは?』

『さつき外へ出て行つたが、直きに歸つて來るよ。』

と話してゐる處へ、兵太郎が表から杖を突いて歸つて來た。

『お才、今日は滅法早かつたな。』

『あのネ、お前さん、お才が珍らしく遊びたくなつたから早仕舞にして來たんだとさ。』

『さうか、それあ宜かつた。どんな商賣でも、商賣と名が付きやあ骨の折れるもんだ。』

時々骨休みをするがいゝさ。』

兵太郎は長火鉢の側へ胡坐をかけた。

親子は茶を入れて飲み乍ら、世間話などしてゐた。

(妾がゐなくなつたら、お父つあんやお母さんはどうするだらう——?)

と思ふと、自分一人をこんな力にして生きてゐる兩親を捨て、他國へ奔る我が身の不孝が譬へやうなく恐ろしくもあれば、悲しくもあつた。けれども、悟られてはならぬから、態と機嫌よく話しをしてゐる處へ、表から人が來たからお才が出て見るとそれはお慶さんから迎への人だつた。其の使は、表に駕籠まで用意して來て、



『成る可く早くお越しを願ひ度う御座います。』

とお慶さんの口上を傳へた。

お才は其の約束はまるつきり忘れてゐたのだつた。

『お才、何處からのお使なんだ？』

『あのネ、實は今日大浦のお慶さんの家にお祝ひ事があつて、妾も呼ばれて、伺ひますと云つて約束してあつたんですよ。』

お才は、異人屋敷とは云へないからさう云つて嘘をついた。すると父も母も、

『お慶さんの家と呼んで下さるとは有難い話だから、行つて来るがいい。』  
と云つて勧めた。

お才は民彌との約束を考へると氣が氣ではないが、然し、お慶さんに會つて正克の事も頼んで置きたかつた。それも此の際重大なことだつた。  
まだ日暮れ前だから、民彌と約束した五ツ半（九時）までは大分時間もある。

『今から行つて、八時前に歸つて来れば十分間に合ふ。』

お才は行くことに決心した。手早く化粧をしたり、衣物を着替へたりして、待つてゐる駕籠に乗つた。

駕籠は大浦を差して走つた。

## 俵屋地藏

( 1 )

汐入りの松ヶ枝川に架つた辨天橋を渡ると直ぐ南山手である。其處は小高い山が海の際まで突き出してゐる。

山の中腹よりやゝ高めの位置に、大浦の天主堂が毅然として聳えてゐる。それは美事



にゴチク式の建築で、屋根の上に、檜の穂のやうな塔が三つ立つてゐる。けれどともも  
う日暮れ近いので、塔も屋根も蠟色にぼんやり霞んで見えた。

お才を乗せた駕籠は、岩石の露出した山の根を迂回して一町ばかり進んだ處から、急  
に左へ折れて、山に附いた坂道を登り始めた。山の處々に木造洋館の外國人の住宅が  
あつた。

山の頂上に、宏大な一と構への屋敷があつた。邸内は數千坪の廣さがあつて、庭園  
は自然の地形を利用し、岩石樹木を配置し、泉水を造り、廣々とした芝生と、四季の花  
を植ゑた花園があつた。

芝生を前にして、木造平家造りの大きな建物がある。

お才は、其の建物の、ベランダ附きの玄關先で駕籠を卸された。其の時玄關の中から  
スカートをかゝげ乍ら靴で石段を軽く踏んで駕籠の側へやつて來た女があつた。大浦の  
お慶さんだ。

『お才ちゃん、よく來て下さいました。皆さんがあんたの來るのを待つてゐるんですよ、  
さあ〜早く入らつしやい。』

お慶さんは、お才が駕籠を下りるとさう云つて、手を引き乍ら家の中へ伴れて行くの  
だつた。

お才は、最初火事ではないかと思つた位、明るい燈火が輝いてゐるのに吃驚させられ  
た。どの部屋にも大勢人がゐるらしかつた。ボーイや召使の女が忙しさに廊下を走つ  
てゐた。

『お客さんがもう澤山來てゐるんですよ。今し方パークス様がお見えになつたばかりな  
んです。』

とお慶さんは客間の方を見乍ら云つた。然しお才はワク／＼してゐたから何を云はれ  
たか分らなかつた。

天井の高い廊下を幾曲りかしてからお慶さんは一つの部屋のドアを開けて入つた。



其處は此の家の主人グラバの書齋だつた。金箔の圖案や横文字が美しく光つてゐる大きな洋書が澤山並べてあつたが、お才には何んだか解らなかつた。部屋の中にあるすべての物が彼女には不思議な物としか映らなかつた。大きな机の上に、銀製のランプが置いてある。

『さあ、お掛けなさい。』

とお慶さんは一寸椅子を引き寄せて云つたが、お才が尻込みしてゐるので、

『ホホホホ、駄目ですよ、お才ちゃん、そんなに臆病では、遠慮することはないからお掛けなさいよ。』

お才は漸う其の椅子へ腰をおろした。

異人の生活、それは未だ嘗て夢にも見たことのない世界だ。

何より先にお才は妙な匂ひを感じた。書物の皮の匂ひだつたのか、煙草の匂ひだつたかそれともグラバの體臭がしみ込んでゐたのか分からぬが、異人の部屋に限つた異様な

匂ひがあつた。お才はもう少しでムカ／＼しさうになつた。すると急に恐ろしいやうな氣特になつて、此の家から逃げ出したくなつた。お慶さんが側にゐなかつたら無論彼女は逃げ出した。

コツ／＼とドアを爪で叩いた、外から英語で何か云つた。するとお慶さんも何か英語で答へた。

グラバが入つて來た。

『お才ちゃん、今晚は。』

お才は立つて叩頭した。

グラバは手を差しのべて握手を求めようとしたが、お才は反對に手を引つ込めて後追りをした。

『お才ちゃんが來てくれたので、わたしどんなに安心したか知れないですよ。ねえ、グラバさん、あなたもさうでせう。』



『さうです、お才ちゃん、ほんたうに有難う。』

グラバはさう云つて丁寧ていねいに叩頭おじぎをした。お才は此處ここへ來るには來たものゝ、さてどうしたらいいか分わからなかつた。

(藤岡ふじおかさんはどうしてゐるだらう?)

と、民彌たみやのことが氣にかゝつた。おそらく民彌は狩り場の狐きつねのやうに戦々兢兢せんくきょうきょうとして遁にげ隠かくれてゐるだらう。そして彼女かのぢよと約束やくそくした五ツ半はんの時刻じこくを千秋あきの思おもひで待つてゐるだらう——と思おもふと、お才はかうしてゐる間まも氣が氣きでなかつた。

『お才ちゃん、少し顔色かほいろが悪いやうですが、氣分きぶんでも悪いの?』

『いゝえ——』

お慶けいさんは、お才が場慣ばなれぬためにひどく心配しんぱいしてゐるのだらうと思おもつた。

『お慶様。』

『何?』

『あなたに少しお話し申まをしたいことがございますが……』

『さう——? どんなことか知らないけれど話はなして御覽ごらんなさいよ。』と云つてお慶けいは氣が付ついて、

『グラバさん、お才ちゃん何なにかわたしに話はなしがあるさうですから、あなたはお客様きやくさまの方ほうへ入いらしつて下さいましな、話はなしが濟すめば妾達めかけたちもあちらへ参まゐりますから。』

『承知しょうちしました、では私向わたしむかうへ行いつて待つてゐますからね。』

グラバは書齋しよさいを出でて行いつた。

『どんな話?』

『あの、わたし、今夜こんやは直すぐ歸かへらなければならぬんです。』

『どうして?』

『行ゆかなければならぬ處ところがございますから。』

『何處どこへ行くの。』



「……………」

「そりや、あんたも忙がしいでせうが、グラバさんのはうでもこの通りお客をして、是非お才ちゃんに来て貰ひたいとあの通り當てにしてゐらつしやつたんだから、今夜はこつちを手傳つて上げて下さいよ。」

「でも……」お才は云ひ様のない當惑の色を浮べた。

「ぢや、其の方の用事は、何時迄に行けばいゝんですか。」と、お慶さんは訊いた。

「五ツ半までによそへ行かなければなりません、其の前に家へ歸つて。」

「どうしても行かなけりやいけないの？」

「えゝ。」

するとお慶さんは暫らく考へてたが、

「ぢや、かうして下さいな、五ツ半の約束ならまだ澤山時間があるから、それ迄此處にゐて下さいよ、さうすればグラバさんにだつて義理が済むから。」

それならばお才も覺悟をして家を出て来たことだから今更厭とは云へなかつた。それにお才は肝腎の河野正克の一件をお慶に頼まなければならなかつた。

「お慶様、もう一つお願いがございます。」

「なあに？」

正克のことになるとお才は妙に氣おくれがして、思はず頬が紅くなつた。

「あの、今年の春、あなたに隠匿つて頂かうとした、河野正克といふ方のことですが。」

お慶は大きく思ひ出したやうに、

「さうく、あの人は一體何處に居るんですの、お才ちゃん知つてるんですか。」

「いゝえ、何處に入らつしやるか存じませんし、お目に掛つたこともありませぬけれど

……ねえお慶様、あの方が若しお官の手に捕まればどうなるんでせう？」

「それああなた、捕まへられたら命はないとも。人殺しも只の人殺しと異つて、外國人を殺したんですからね。」



『今度パークスとかいふ方が長崎へお出でになつたのは、其の談判に來たのだとか申しますのは、眞個のことでございますか。』

お慶さんは眼を圓くして、

『お才ちゃん、一體そんなこと誰から聞いて?』

『實は、妾の店で、お客さんが話してゐたのを聞いたんでございます。』

『ほんとうに世間の早耳とはよく云つたもんですね。あなたには眞個のことを話して上げるが、パークスさんが來たのは、他にもつと大きな事もあるけれども、表向きはやつぱりあの一件といふことになつてゐるんです。だからお役所の方でも、此の際河野さんの探索を厳しくするやうになるでせうねえ。』

『お慶様、あなたのお力で、河野さんを助けて頂くことは出來ますまいか。』

お才は一生涯懸命になつて云つた。

『そりや、満更出來ないこともないが……』

『それならどうぞ助けて上げて下さいませ、妾が一生のお願ひでございます。』

『お才ちゃん、あなたはあの人のこととなると、ほんとに一生涯懸命ですね。』

お慶さんは擲揄ふやうな眼付をして云つた。お才は狼狽して眞紅になつた。

『ホホホホ、いゝのよ。あなたが河野さんのことをどう考へてゐようと、妾の知つたことぢやありませんものね。處で、あなたのお頼みだが、わたしも最初から關り合ひだから、厭といふことも出來ない義理、それに外ならぬお前さんのお頼みだから一と肌ぬぐ氣ですけれどね、就いちやあのお才ちゃん、妾よりもつといゝ人があるんだよ。』

『どなたでございませう。』

『グラバさんに頼むのさ、グラバさんが助けてやらうといふ氣になれば譯はありませんよ、何しろあの人は領事さんより誰より勢力があるんですからね。』

『グラバさんが承いて下さるでせうか。』

『承きますとも、お才ちゃんの頼みなら、あの人はどんな事だつて承知するのよ。』



と、お慶さんは意味ありげに云つた。

(二)

客間には、陽氣な談話と、香り高いエヂプト煙草の煙と、適量の酒の香と、それらが混合して愉快的な空気を醸し出してゐた。

公使パークスと、東洋艦隊司令官クーパー提督の二人が其の夜の主賓だつた。隨行の書記官ヘンリー氏や、長崎領事ガワール氏の顔も見えた。艦長や副艦長級の海軍士官も五六名來てゐる。

主人側は、グラバの外に其の共同經營者フレデリック・リンガー、支配人スミスなどが來賓の斡旋につとめてゐた。

男ばかりの主客の間に、十數人の婦人達が交つてゐた。女は全部日本人だつた。其の半數は丸山の遊女で、あとの半數は純然たる洋妾だつた。女達はそれ／＼華やかな服装

と化粧を競つた。殊に丸山遊女の廓其の儘の衣装や髪形は華美だつた。それは事實長崎では大きく誇るべきものの一つだつた。

けれども、素人のラシャメンだつて敢てそれに劣るものではない。否むしろ、地味な素人娘の有つ魅力には、いくら濃艶な遊女でも及ばないことがある。

今夜の宴會に於て、彼女達のもつ役割は非常に重大であつた。何故かと云へば、彼女達は主客それ／＼の夫人の役目を、或ひは形式的に、或ひは實質的に、奉仕する義務があるのだつた。見様に依るとこの宴會の御馳走は單にそれだけだと云つても過言ではなかつた。

パークスの右側に寄り添つた椅子には、花月のお職女郎で丸山一の全盛を馳せてゐる花扇が居た。有名な提督の夫人は、お松といふ白熊のやうに圓つこい體と雪のやうに白い皮膚を持つた島原生れの女だつた。それは提督の婦人に對する趣味と實用とを兼ねた女性であつた。さういふ風に來賓は一人々々婦人の選擇權を與へられてゐた。



それらの英國人達は、この土地の世界に類のない美しい自然と、それにも増す女達の美に感嘆したり、満足を感じたりしてゐるのだつた。彼等は彼等の東洋遠征がいに華しい成功であつたかといふことを感じた。そして一人々々自分を英雄だと確信した。パークスは、長崎から軍艦で密かに鹿児島へ行く豫定だつた。そして薩摩の國主と會見して、徳川幕府を倒す方策に就いて協議する約束になつてゐた。

然し、此の席では誰もさうした政治問題に就いて意見を發表する人はなかつた。若し誰かさうした事柄に就いて論じたと假定しても、それはひどく詰まらない問題のやうに人々から思はれたに相違ない。

『公使閣下は、日本の婦人に就いてどんな感想をお持ち合せですか。』  
誰かゞさういふ質問を放つた。

パークスは、十五歳の少年で支那へ来て以來、今年四十歳になるまで殆ど全部といつていゝ月日を東洋各地で暮して來た。老練な其の外交官は、太い五本の指で虎鬚をしこ

きながら、議會で報告するやうな莊重な音吐を以てそれに答へた。

『婦人の美德は、柔順、貞節、無口、この三つである。然し神様は、あらゆる動物に道徳を與へなかつたやうに、婦人で美德を有つてゐるものは極く僅少である。我々は本國や印度や支那に於て常に其の反對の惡徳に悩まされた經驗を多く持つものである。然るに、日本の婦人は、貞節を除く他の二つの美德を概して有つてゐるものであることを私は確信する。』

パチ／＼と手を叩く者や、『同感々々。』と叫ぶ者があつた。其の揚句は一同はドツと笑ひ崩れた。

『提督はどうお考へですか。』

ウイスキーの酔が廻つて、巨きなお松の尻を抱くやうにしてうつとりと眼を閉ぢてゐた提督は、吃驚したやうに人々を見廻した。

『わしは鴨の丸焼きを好くやうに、日本の女が好きぢや。』



と云つてお松の體を撫で廻した。

人々は割れ返るばかりに笑つた。

女達は、英語と和蘭陀語をちやんぼんにして話した。そして猶足りないところは、女らしい笑ひや色氣のある動作で補つた。そして各々ホテルへ行く約束や、丸山の廓へ行く約束が出来上つた。

(三)

お慶さんは、お才の手を曳いて其の部屋へ入つて行つた。

『あら、お才ちゃん。』

女達は大概お才を知つてゐるから、彼女の突然の出現を迎へて驚きの聲を發した。男達の眼も同じ様にこの新來の婦人の體に注がれた。

お才はカツと逆上せて了つた。お慶さんは頓着なく前へ進んで流暢な英語で云つた。

『皆様、今晚此處へ集つた婦人達は長崎で有名な美人ばかりです。けれども妾の名譽のために長崎で一番美しい人を御紹介いたします。』

異様などよめきさへ起つた。お慶さんは先づ公使閣下の前へお才を引張つて行つた。

『お、何んといふ美しい淑女だ。』

パークスは椅子から起ち上つて手を差しのべた。お才は、お慶さんから教へられてゐたから恐々自分も手を差し出すと、パークスは案外柔かに彼女の手を握つて振つた。

次に提督は、重たいお松の體をやを膝から卸し、軍人らしい威嚴のある態度で握手した。次から次と來賓達は握手を求めて來た。最後にお慶さんは公使の隣の椅子へお才に腰を掛けさせた。

躑て食堂が開かれた。人々はゾロ／＼と食堂へ入つて行つた。主客全部席についた。すると今度はお才はグラバの横に坐らせられた。

幾人かの廣東人のボーイは敏捷に動いて、瞬く間に人々のグラスに酒を注ぎ、或ひは



料理を運び出した。それから長時間に亘つて料理は際限なく運び出された。スープ、豚牛、野菜、魚——。大勢の女達は上達ナイフとホークを使つて其の料理を食べたり、男達と同じやうに乾盃したりした。お才は西洋料理の食べ方も知らなかつたし、食べたつて咽を通りさうもなかつた。

『お才ちゃん、あなたは西洋料理はお嫌ひですね。』グラバは心配して云つた。

『わたし頂いたことがございませんの。』

『それは悪いことをしましたね、それではあとで日本のご飯をお上んなさい。』

『いゝえ、ちつともおなかは空きませんから。』

實際お才は食事どころでなかつた。民彌との約束を思ふとかうしてゐる空はなかつた。けれども、食事が了るまでは立つことも出来ないし、どうしたらいゝか分らなかつた。

時は刻々飛んで行つた。然し食卓はいつになつても了るけしきはなかつた。

お才は終ひに顔の色が蒼くなつた。

『お才ちゃん、どうかしましたか。』

『はい、少し気分が悪うございます。』

『それは大變だ。』

グラバは慌てゝお慶さんと呼んだ。

『お才ちゃん、どうかしたの。』

『此の人は気分が悪いのださうです、お慶さん、あなたにお頼みます。』

『承知しました、さあ、一寸失禮して向うへ行きませう。』

お慶さんは食堂の外にお才を連れ出した。

『お慶様、妾を歸らして下さいまし。』

『どうしても歸るの？』

『えゝ。』

『ぢや、駕籠を呼んで送つて上げるから、暫くあちらでお薬をのんで休んで入らつしや



お慶さんは先刻の部屋とはちがつた部屋へお才を連れて行つた。

『頭痛がするの？』

『はい。』

『それぢや、妾が良い薬を持つて来て上げませう。』

お慶さんはお才を其處へ置いて出て行つたが、暫くすると、盆の上に小さなグラスを載せて持つて来た。グラスには紅い液体が入つてゐた。

『甘い葡萄酒です、これを一杯飲むと直ぐ癒りますよ。』

と云つて、其のグラスを持つてお才に渡した。葡萄酒ならお才も飲んだことがある。

お才は甘い舌觸りを感じた。思ひ切つて一と息にのんで了つた。

『直ぐ快くなるから、此の椅子の上で横になつてらつしやいよ。』

フワ／＼した長い安樂椅子の上へお慶さんはお才を伴れて行つて寝かした。

『お慶様、今何時でせうか。』

『さうね、今妾が時計を見て来て上げるけれど、五ツ半には大丈夫だから安心して入らつしやい。』

と云つて、お慶さんは部屋を出て行つた。それつきりお慶さんは戻つて來なかつた。

お才は、安樂椅子の上に身を横たへてゐると、何んとも云へず好い氣持になつて睡たくなつて來た。

『睡つたら大變だ、駕籠が來次第歸らなくちやいけない。』

けれども頭が快く痺れて來て、臉がおのづとくツ付いてしまふのだつた。食堂の方から賑やかな笑ひ聲が聞えた。依屋地藏の側で彼女の來るのを待つてゐる民彌の妾が眼に浮んだ。

『妾はかうしちやゐられない。』

お才は駕籠が來るのを待たずに歩いて歸らうと思つて體を起さうとしたが、不思議や



五體を縛められて了つたやうに全身の自由を奪はれてゐた。お才は何かしら大變なことが持ち上つたやうな氣持がして、一生懸命體を跪いたが、跪けば跪く程力が抜ける一方だつた。黄色いランプの光が眼の中から消えていつた。やがて有らゆる反抗心も、力も失せてしまつて、大きな睡魔の中に抱き込まれて了つた。

お才は昏々として深い睡りに落ちた。

(四)

丸山の廓の裏手を通つて茂木港へ行く街道は、忽ち可成り急な坂路になつてゐた。此の坂を長崎の人はビントコ坂と云つてゐる。

元祿年間長崎へ來てゐた唐人に何旻徳といふ者があつた。丸山の遊女音羽と深く馴染んでゐたが、旻徳は商賣の手違ひに苦しんだ揚句、贖金を使つたことが發覺して遂に斬罪の刑に行はれた。此の事を聞いた音羽は身も世もあらず歎き悲しみ、ひそかに廓を脱

け出し、刑場雷ヶ岡へと忍び寄つて星明りの下に旻徳の晒し首を奪ひ、其の首を抱き締めて自から其の場で喉を切つて死んだ。

音羽が心中した場所に『傾城塚』と云ふ古い碑がある。そして此の坂を旻徳坂と呼ぶやうになつたのだ。坂を殆んど上り切つた處に、依屋地藏と呼ぶ小さな祠がある。これは丸山花月の一族で有名な俳人であつた依屋天外の別莊が其處にあつたので、依屋地藏の名が附いたのだつた。

其の地藏の祠の側に一本の大きな松の木がある。餘程年數を経た松と見えて、四方に根を張り、太い枝を虚空に擴げてゐる。

松の根方に腰を掛けてゐるのは藤岡民彌だつた。今夜は月はなかつた代りに、空一面に星が瞬いてゐる。駈落ちなどするにはもつて來いの晩だ。

民彌は旅装束甲斐々々しく、僅かな風呂敷包を斜に背負つて、云はうやうやない緊張した氣持でお才が來るのを待つてゐる。公金を費消した揚句に女と駈落ちをするといふ武



士に有るまじき行爲を自責することさへも忘れてゐた。尤も其の煩悶はすでにし盡した  
後だ。いかに彼が墮弱な武士だからといつて、これだけの悪事や不始末を敢てして良心  
の呵責を受けないほどの人非人ではない。費ひ込みの破綻を來した時既に幾度も自殺を  
決心したくらゐだ。けれども現世に未練があつて自殺を執行することが出来なかつた。  
『何故俺は死ねないのだらう？』

と考へて見る民彌の眼前にいつでもお才の顔が現はれた。

『俺はお才がなくては生きてゐられない、此の世にお才を残して死ぬことも厭だ。』

彼に残されてゐる方法は、女を殺して自分も死ぬか、或ひは女を連れて他國へ走るか  
この二途より外になかつた。彼はお才と一緒に逃亡することを相談して、萬一お才が承  
知しなければ其の場で女を殺して自分も返す刃で自殺する決心だつた。然るにお才は駈  
落ちを承諾した。

民彌は、お才を伴れて他國へ行つて暮す楽しい生活だけを夢想した。其の目的のため

にはいかなる犠牲を拂つても構はんと覺悟した。武士の名譽——そんなものは犬に食は  
しても惜しくない。親兄弟や親類の一門の迷惑——どんな悲劇が起らうとも、お才の甘  
い聲が耳の側で聲えてゐる間は平氣で暮せさうな氣持がした。  
松の枝に風が當つて颯々と鳴つた。叢の中では頻りに蟲のすだく音がした。先刻から  
坂を上つて來る者も上から降つて來る者もなかつた。五ツ（八時）の鐘が鳴つてから  
う餘程經つ。

『秋だなア。』

と、民彌は呟いた。さうしてゐながら彼は坂の下から息せき切つて登つて來るお才の  
姿を幾度想像したか知れないのだ。其の都度想像の中で彼女を抱き締めた。柔かな肩、  
手、熱い唇……。

お才はなか／＼來ないのだ。五ツ半といふ時刻はもう確かに來てゐると思つた。民彌  
は二、三回坂の中途まで降りて行つて見た。



『どうしてかう遅いのだらう？』

然し民彌はさう考へ乍らも、お才が來ることについては確信を持つてゐた。今日の晝彼女と約束した時のことを考へて見ても、彼女が其の約を裏切る筈はないと思つた。

『おほかたまだ家の者が起きてゐるから、それで出られないのかも知れない。』

とも考へたが、これまでも迎ひにやれば直ぐやつて來ることが出來たお才だから家を出ることにさう困難が伴ふやうなことはあるまい。

民彌は段々不安になつて來た。時間が経過するに従つて、楽しい空想の影が薄らぎ、反對の想像が其の上を塗り潰すやうになつた。お才の身の上に起りさうな有らゆる事柄を想像してみた。

『若し來なかつたら……』

彼は今が今までそんな悲惨な場面を考へたことはなかつた。お才が來ることばかり考へてゐた。が、萬一來なかつたらどうする——？ 民彌はさう考へたばかりで、全身が

すくんでしまふやうな氣持がして、額から脂汗が滲み出た。全くそれは考へたばかりでも戦慄すべき悲劇である。

今までどうしてそれを考へなかつたのだらう？

『お才は心變りがしたのかも知れない。』

或ひは最初から自分と一緒に逃げる氣はなく、ほんの一時のがれに承知したのかも知れない。女は魔性だ、どんな秘密だつて有りうるのだ、自分をベテンに掛けて待ちほけを食はせておいて、今頃は何處かで舌を出してゐるのかも知れない……。

民彌は、つい今し方まで考へてゐたお才とは正反對の、女の有らん限りの惡徳をお才におつかぶせて考へて見た。

さうかと思ふと、今にも坂の下から彼女がやつて來さうな氣持がした。けれどもそれは空だのみだつた。

空に散らばつてゐる星の位置が變つて、山の下の寺院から打ち出した梵鐘が四ツの時



を報らせた。民彌はあせり、もがいて気が狂ひさうになつた。彼はかうして待つてゐるのに堪へられなくなつた。

『家へ行つて見よう。』

それが一番早い解決方法であるやうな気がして、急に坂を下りて廓の近くまでは行つて見たが、其處から先は幾筋も道があつた。若し自分が行つたあとへ行き違ひにお才がやつて来るやうなことがあるとそれこそ取り返しが付かなくなる。お才がやつて来た時自分が居なかつたなら、彼女は憤つて直ぐ引つ返してしまふに極つてゐる。さう考へると、此の場を離れることも出来なかつた。

廊で太鼓を打つて騒ぐのが手に取るやうに聞えた。民彌は苛ら立ちながら坂道を上つたり下つたりしてゐた。

然し、何時迄待つてゝもお才はやつて来なかつた。民彌は最後にお才の家へ行つて見る決心をした。もはやそれ以外に方法はなかつた。然し、自分がこの姿で歩いてゐると

ころを若し知り人に見付けられたら一大事だから、彼は成るだけさうした危険の少ない裏町を選つて歩いた。

『お才が家にゐたら——』

そして逃げることを肯じなかつた。一刀兩断に彼女を斬り殺して、自分も死なうと覺悟をした。

銅銀のお才の家は、戸は閉めてあるが、微かな燈火の光が隙間から漏れてゐた。民彌は憎い／＼お才の姿を家の中に描いた。ブル／＼をの／＼く足を踏みしめ乍ら光の差す處から覗いて見たり、耳を當てがつて見たりしたが、家の中は見えもせず、物音も話し聲も聞えなかつた。

『お才、お才。』

民彌は低い聲で呼んだ。すると、母親が起きてゐたと見えて、

『どなた？』



と、答へた。

『わしだ、藤岡だ——お才は家に居るか。』

お種は其の聲にびつくりして、慌て土間へ下りて、まだ引いてあるばかりの戸をガラ／＼と開けた。

『まあ、旦那様でございますか、大層遅く。』

お種はめつたに家などへ来たこともない民彌が夜更けてやつて来たので驚いたのである。

『お才は居るだらうな。』

『否え、あの娘はまだ戻つて参りません。』

『何處へ行つたのだ。』

『日暮れ前に、大浦のあの兒の知合ひの人から呼びに來られて行きましたが、あんまり歸りが遅うございますから、わたしは若しかしたら途中であなた様にでもお目に掛つて

ゐるんではないかと思つてゐたところでございました。』

と云ひ乍らお種は暗がりて民彌の姿をすかし見て、

『旦那様、變つたお身なりで、どちらへお出掛けでございますか。』

『いやなに……少し急ぎの用で旅に出ることになつたから、お才に會ひに來たのだ。』

『それはまあ、よくお寄り下さいました、生憎なことでしたが、直ぐに誰か頼んで迎ひにやることに致しますから、とにかくお入り下さいまし。』

お才が家にゐないことは確かだ。

『行き先は分つて居るのだ。』

『はい、よく分つて居ります。旦那様も御存じかと思ひますが、大浦のお慶さんと

いふ人の處から迎ひが參つて出掛けました。』

『何、お慶の處から……？』

民彌は再び大きな疑問にぶつかつた。



『何の用事で行つたのだ。』

『さあそれはわたしも一向存じませんが……』

(やつぱり、彼奴の云つたことは嘘だつた——)

こんなことゝは知らず、自分一人旅支度までしてあんな場所にベン／＼と待ちこがれてゐたのかと思ふと胸が張り裂けるやうな憤怒が湧き上つた。九死一生の場に臨んでゐる自分を振り捨て、平氣で大浦のお慶の處などへ行つてゐるお才は、掴み殺してやつても飽き足りない氣持だつた。

『グラバー——?』

民彌は、フと、あの異人のことが頭に浮かんた。グラバがお才に付き纏つてゐたことを思ひ出した。そして、大浦のお慶と其の事に何か關聯があるのではないか? といふ氣がした。

民彌は、今はすつかり明瞭にされてしまつた自分の立場を考へると、憤りと、恥辱と

で半狂人のやうになつた。

あすの朝になれば、自分の悪事が曝露して、細目の恥辱を受けなければならぬのだ。どうしても今夜の内にお才を見付け出して武士の意地を立てなければならぬと思つた。

お種が上れとすゝめるのを振り切つて民彌は暗い町を走り出した。目指す處は大浦のお慶の家だつた。お慶の住居はかねてから知つてゐたから、民彌は息せき切つて其の家の前迄行つて見たが、嚴重な門は堅く鎖され、燈火一つ差さずしんと静まり返つてゐるのを見ると門を叩く勇氣も失せて了つて彼はスゴ／＼と元の方へ引き返すのだつた。

何んといふ未練——民彌は此の期になつても、若しかしたらお才が行き違ひに依屋地蔵へ行つて自分を待つてゐるかも知れない——と思つた。有り得べからざる希望に期待を掛け乍ら、彼は又もやピントコ坂を駆け上るのであつた。



お才は夢を見てゐた、夢の中の場所は何處だか判らなかつた。何しろ彼女はよく走り廻つた。有らゆる出来事の破片が、碎けた瓦のやうに、三角だつたり、いびつだつたりして、次から次へと彼女の前を飛び去つて行つた。彼女が走るのか、それらの出来事が走馬燈のやうに廻つて來るのだから、どつちだか分らなかつた。けれども其の大部分は未知の世界であるやうな氣持がした。

夢の中のお才は、民彌と駈け落ちをしなければならんと思つた。たゞそれが民彌だと思ふと、正克だつたりした。結局それがために彼女は狂奔してゐるやうな氣持だつた。一面の火の海の中を走つてゐる時もある。焼野原のやうな處を走つて行くと不思議にも銅座の家だけ其の儘あつた。

「お父つあん、早く、早く。」

彼女は門口でわめき立てた。

中風病みの父親の兵太郎はどういふわけだか順禮みたいな旅裝束をしてゐた。彼女は

父親を連れて民彌が待つてゐる處へ行くつもりだつた。父親の手を引つ張つて一生懸命走つた。

父親は石のやうに重くなつた。ピントコ坂の下から外國のマドロスが大勢で彼女を追つて來た。彼女が逃げようとする、父親は大磐石のやうに重たくなつて了つた。

「う、う……」

お才は、微かな聲を出した。其の時胸の處で組み合せてゐる指の先がビク／＼痙攣した。

顔には、針の穴より小粒な透明な汗が滲み出でゐる。結び立ての島田は長椅子の肘掛で無残に押し潰されてゐた。其の亂れ髪の端が、うす紅味を帯びた頬だの、首を曲げて寝てゐるために圓く縊れてゐる眞つ白な喉のあたりまで伸びてゐた。

高く盛り上つた胸が、兩手を載せた儘、上下に動いてゐた。二重の瞼は靜かに閉ぢられて、微かに白い齒が見えるくらゐ開いてゐる口から、スウ／＼寢息が漏れてゐる。



『美しい——』

グラバは其の寝顔を覗き込むやうにして自分の心に云つた。彼は久しい間身動きもせず飽くことを知らず見入つてゐた。彼の魂は睡つてゐるお才に奪はれてゐた。

いかなる藝術家でも、造化の力でも、これほどの美しさを表現することは不可能だと思つた。そして彼自身の胸は、感激のため破裂しさうに感じた。

邸内は宵の騒ぎに引きかへてシーンと静まつてゐた。來賓達は、みなそれ／＼彼等の落ち付く場所へ引き上げて行つた。一番最後まで残つてゐたお慶さんは、グラバを此の部屋へ伴れて来て、お才のはうを指さして、非常に人好きのする微笑を見せ乍ら彼の耳に囁いた。

『御覧なさい、よく寝てゐるから——この娘はきつと疲れてゐるんでせうよ。どうせ今夜は歸れないからこの儘泊めてやるんですね。』

お慶さんは自分が飲ませた薬のことはおくびにも出さなかつた。そして、これで自分

の役割は完全に果されたと思つた。

『泊めてもいゝでせうか？』

其の時グラバは心配になつて云つた。

『大丈夫ですとも、妾が保證しますわ。』

グラバはお慶さんを玄關の外まで送つて行つて又云つた。

『お慶さん、ほんとにいゝでせうか？』

お慶さんは初めて高らかに笑つた。

『グラバさん、貴郎は今よりずつと幸福になれますよ、』

さう云つてお慶さんはお供をつれて行つて了つた。グラバは戸外に立つて星の降るやうな空を仰いでゐた。與へられた大きな幸福は目の前にある。然しそれを手に取つて善いか悪いか久しく心が決しなかつた。

お慶さんの自信に満ちた言葉は彼を勵ました。彼は猛然たる勇氣が全身に漲るのを意



識し乍ら、最後に大きく夜氣を呼吸して、お才が寝てゐる部屋へ戻つて來た。

それからまたどれ程かの時間が経過した。グラバは睡つてゐるお才の體に指一本觸れなかつた。決心が鈍つたのではなかつた。良心が眼醒めたのだ。

衝動を押へることは、思つた程苦しくはなかつた。然し、一度お才は睡つてゐて脚を動かした。着物の裾が軽く滑つて椅子の下の方へ垂れた。グラバは態と眼を外しながら掛けてやつた。

其の時お才はパツチリと眼を開いた。彼女は夢の中の出來事を追ひ乍ら天井の方を見てゐたが、やがてグラバの姿が眼に入つた。

「あつ！」

お才は忽ち非常な愕きを感じて、椅子から飛び起きようとした。

「危ない。」

グラバは急いで手を差し延べて彼女が椅子から轉げ落るのを防がねばならなかつた。

やう／＼體を起したお才は羞恥のために眞つ赤になつて、消え入るやうな恰好をした。

「妾……妾……」

お才は兩方の袂で顔を覆つて了つた。グラバはお才が泣き出したのかと思つて心配するとさうではなかつた。お才はほんの僅か睡つたつもりだつた。はしたない自分の寢姿をグラバに見られたのを恥かしく思つただけだ。

「妾、ついつかりして……」

「お才ちゃん、心配しなくてもいいです。」

お才は急いで俵屋地藏へ行かなければならないと思つた。

「お慶様は？」と、お才はグラバに訊いた。

「お慶さんは歸りました。」

「えつ？」お才は眼の色を變へた。

「旦那様、今、何時でございませう。」



「さうですね。」グラバはチョッキの上に輝いてゐる黄金の鎖を手操つて時計を取り出して眺めた。針は午前二時を指してゐた。

「今、丁度丑刻ですね。」と彼は日本流に云つた。

「ひえツ！」

「お才ちゃん、どうしました？」

「わたし……わたし……。」

お才は見る／＼眞つ蒼になつた。

「わたしどうしよう……。」

お才は今度こそ本當に泣き出した。グラバは狼狽した。

お才は物も云はずに飛び出さうとした。

「何處へ行くのです。」

「わたし、歸らなければなりません。」

「こんな夜半に歸れるものですか、いけません。」

「でも……。」

「危ないからいけません。明日の朝早くお歸んなさい。」

グラバは前に立ち塞がつて留めた。

(今から行つたつて仕様がなない。)

お才も幾らか気が落ち付くとさう考へた。五ツ半といふ約束した時間からはもう半夜以上も経過してゐる。今時分行つたつてどうならう——？

あれ程固い約束をしておきながら、瀬戸際になつて、うくわつにも睡つて時を過して了つた自分の不覺をお才は厳しく責めたり悔いたりしたが、いかに悔いても及ばなかつた。

(民彌様はどんなに怒つてるだらう？)

民彌の怒つてゐる有様が眼に見えるやうだつた。全く申し譯がないと思つた、けれど



も、

(あの人は獨りで何處へも行くやうなことはない。あした逢つて謝罪らう、そして、あの晩駈落ちをするよりほかはない。)

と、やうやう考へがそこへ落ち付いた。此の家へ泊めて貰ふことも後めたくないことはないが、然しこの深夜ではまつたく仕様がな、もう少し待つて夜明け前に家へ歸ることにしようと思ひ出した。

お才は力なく元の椅子に體を落した。グラバも腰掛けた。深夜——息づまる沈黙——。グラバは今彼女を留める拍子に力強く觸れた感覺を思ひ返して、折角の自制力を失ひさうになつた。興へられてゐるものを手に取らずにゐるのは馬鹿正直に過ぎない。其の結果、たとひどんなことが起きようとも、爰は治外法權の區域で、自分は絶対に日本の法律に支配される恐れはないのだ。沈んやお才は必ずしも阻むかどうかさへ分らないではないか？

けれども彼は其の決心の一步手前で踏み留まつた。それは純情なお才に向つて暴力的な手段で愛を求めることがいかに野蠻な行爲であるかを反省したからだ。彼は紳士的な態度でお才に求愛しよう、と考へたが、さうなると言葉が出なかつた。そして、心中で激しく悶えた。

『お才ちゃん。』グラバは呼んだ。

『はゝ。』

お才は美しい眼を擧げて相手の顔を見た。

『あなた、私の心が解りますか。』

『あなたの心？』

『さうです、今夜爰へあなたを呼んだ私の目的、それがお解りですか。』

『妾、お客様のお相手をする筈でした、でも、わたしは言葉も何んにも知りませんもの……。』



お才は全く爰へ來たばかりで何の役にも立たなかつた自分を恥ぢてゐた。  
『それはあなたを呼び寄せるための口實に過ぎませんでした、全くは、他の目的のため  
なのです。』

『お才ちゃん、私はあなたが好きです、あなたを愛します……今年春初めてあなたに  
逢つた時からです。けれどもそれは段々強くなりました。あなたのためなら私はどんな  
ことでもするでせう……あなた、私の云ふことを承いてくれますか？』

と、グラバは激しく吃り乍ら云つた。若々しい其の面上には太陽のやうな熱情が輝き  
溢れてゐた。

お才は愕きのあまり卒倒しさうになつた。彼女はこの異人が前から自分に好意をもつ  
てくれることを知つてゐたが、それは單なる好意に過ぎないと思つてゐた。それ以上の  
意味があるとは考へなかつた。そんなことは餘りに世間知らずの子供じみた過信だと云  
はれても仕方がないが、高島で會つた時でも、近頃彼女の店へ來て話しをする時でも、

さういふ氣持がしてゐた。考へて見るとそれはグラバに對する何んとなき尊敬の念が彼  
女にさう信じさせてゐたとも云へる。長崎におけるグラバの聲望もさることながら、親  
しく接して見ると、其の眞摯な、紳士的態度が、彼女のみならず有らゆる人々に對して  
一種の親しみと信頼の念を起させることは事實だつた。毛唐人とは云ひながら、グラバ  
程の人が、自分のやうな女に、思ひを掛けてゐるなどといふことがどうして考へられよ  
う、だから、民彌がグラバのことでやきもちをやいたりすると可笑しくて仕方がなかつ  
た。

處が、どうだらう、グラバは今自分に向つて戀を打ち明けて來たのだ。お才にとつて  
はまさに青天の霹靂だつた。

お才はどうしようかと思つた。どうしようかと思つたといつて、勿論彼の要求を聞き  
入れる氣はない。グラバに對して、尊敬や親しみこそ持つてゐたけれども、愛情を受け  
入れる用意は些かもない。相手は眼色毛色の異つた毛唐人だもの、そんなことは無理な



はなしだ。只、此の場合恐れることは、相手が暴力を以て迫つて來ることだつた。

然し、存外お才は強くなつた。それは一つはグラバに對して抱いてゐた觀念を裏切られた憤りでもあつた。又、無法なことをする男に對する當然の反抗心でもあつた。

『お才ちゃん、どうか私のお頼みを承いて下さい。』

グラバは椅子から滑ち落ちて 跪かんばかりにして云つた。

『グラバさん、いけません。』お才は後ろへ身を引いた。

『あなたの云ふことなら何んでも聞きます、私の財産、全部あなたに上げます。』

『厭です、厭です。』

と、お才は叫んだ。彼女は其の時男の眼の中に猛獸のやうな光を見たから、今にもグラバが飛び掛つて來るかと思つてゐると、反對に其の眼は和らいで、憂鬱に瞬いた。

グラバは靜かに起ち上つて、ドアの方へ歩き掛けたが、振り返つて、

『お才ちゃん、心配しないで、もう一時してお歸んなさい、玄關は何時でも開くやうに

してあるから。』

グラバは靜かにドアを開けて出て行つた。

(六)

其の朝、長崎の市中は、異常な事件で沸騰した。

早起きをした附近の百姓が、茂木街道の依屋地藏の前を通ると、松の木の根方で、一人の武士が腹を切つて死んでゐた。

大騒ぎになつた。村の者が馳せ集つて來て直ぐ様長崎の奉行所へ此の事を届け出た。奉行所からは時を移さず検死の役人が出張した。

腹を切つてから餘程時間が経過し、それに美事に割腹してゐたから、全く粹切れて了つてゐた。武士は、松の根に腰を掛け、足を前へ踏ん張つた形で切腹して、前屈みになつて死んでゐた。旅仕度で、側らに荷物が置いてある。邊りの土は一面の血を吸つてゐ



た。

所持品を調べるまでもなく、検死の役人の中にも顔を見知つた者があつたから、直ぐにそれが薩摩屋敷の武士であることが分つた、そこで、早速薩摩屋敷へ報告して死骸を引取りに来るやうに云ふと、屋敷から留守居役を始め二、三名が現場へやつて来たが、『いかにも此の者は我等の屋敷の者であるが、不都合の廉があつて数日前主君から永の暇が出た者で御座る。だから現在藩とは何等関係ない者であるから死骸を引き取るわけにいかない。』と留守居役は云つた。

藩の體面を重んじてかう云つてゐるのだといふことはよく分つてゐるから、役人の方でも氣を利かして、『お暇を出した者とあれば、貴藩でお引き取りなさいとは申さんが、此の者の生前の知人も御座らうから、其の人々において引き取られたが宜しからう。』

『さういふ次第ならば引き取りませう。』

といふことになつて、人を呼んで死骸を引き取つた。が、それ迄には大分時間が掛つた。

寄るとさはると此の噂で持ち切つた。

誰云ふとなく、藤岡民彌の死因は、前から關係があつたお才を伴れて逃亡する筈のところ、土壇場になつてお才が變心したために、憤怒の餘り、腹を切つたのだといふことが評判になつた。民彌とお才との關係は随分一部では評判だつたから、さういふことは直ぐ様推測されることだが、ゆふべ夜更けて民彌がお才の家へやつて来たことや、其の時お才が家にゐなかつたことなども、誰が見てゐたのか聞いてゐたのか知らぬが、すつかり世間へ知れてしまつた。

批評はとりくゞだつた。

『約束して置き乍ら其の期になつて變替へするとは、お才といふ女は薄情な女だ。』



「然し武士ともあるものが、主人の金を窃んで女を伴れて駈落ちするとは不届至極だ。だから天罰で女に捨てられたのだ。」

「さう云ふけれども、惚れた人情は武士も町人も變りはない。お才の爲なら武士を捨てて他國へ逃げようといふ藤岡民彌といふ人が氣の毒ぢやないか。お才が一緒に逃げるか心中でもすれば、立派な近松の淨瑠璃が出来るところだつた。」

「さう云へば場所もあらうに、女郎でさへ唐人と心中したピントコ坂で、女に捨てられて獨りで腹を切つた藤岡民彌は、よつぽど女運の悪い男だ。」

要するにお才が薄情だといふ點に於ては衆口一致、誰も異論はない。

處が、間もなくもう一つの評判が傳はつた。それは昨夜お才が南山手のグラバの家へ行つてゐたといふことだつた。この事は同じ様にグラバの邸へ呼ばれて行つた洋妾達によつて確實に語られた。

「お才はゆふべグラバの家へ泊つたさうだ。」

「お才が今朝早く大浦の方から歸る處を見た者がある。」

單にお才が心變りがして藤岡民彌が腹を切つたといふだけでも大事件なのに、民彌を捨て、異人の懷ろへ走つたといふに至つては、更に問題が擴大されずにはなかつた。いよいよ以てお才といふ女は、薄情を通り越して一滴の血も涙もない非人間だといふことに決定して了ふより外はなかつた。

平常お才をよく知つてゐる人達は、出来ることなら彼女を辯護してやりたいと思つたが、それらの事情が事實であるとすればどう辯護する餘地もないのだ。

「お才がまさかそんなことを。」とでも云はうものなら、

「そこが女の恐ろしいとこだ、昔から外面如菩薩内心夜叉と云ふのはこのこと、美しい女ほど油斷のならぬものはない。」

お才は夜明け頃家へ歸つて來た。そして、民彌のことを心配してゐるところへ此の事件が持ち上つた。



依屋地藏で腹を切つて死んだ武士が民彌だと知つた時、お才は全く失神して了つた。濟まぬとか、言ひ譯がないとかいふ氣持ではなかつた。自分が手を下して民彌を殺した氣持だつた。

有らゆる世間の評判、彼女に對する非難や罵詈謗、それも悉く耳に入つた。けれどもお才は一言の言ひ譯もしようとは思はなかつた。むしろ、もつと厳しく、酷く、誰か來て自分の五體をズタ／＼に切りさいなんで呉れたらとさへ思つた。それは民彌に對するせめてもの心やりになるのだが。

お才の涙は乾いて了つた。すでに心に覺悟が出來てゐた。

『民彌様、妾も直ぐ後から行きます。』

お才は觀念の眼を閉ぢた。

## 甦 生

### (一)

お才は暗い夜をさ迷ひ歩いてゐた。

時々、犬が彼女に向つて吠えた。さうかと思ふと、吠えたあとで、考へ直したやうに跡について來て、氣の毒さうに耳を顫はせたりすることもあつた。

人は犬のやうに夜眼が利かないから擦れ違つてもよくは見えないけれども、お才は、おどろに髪が亂れ、顔の色は蒼ざめ、二つの眼は苦惱と洗ひ盡した泪のために光を失つてゐた。

『お才、貴様はよくもよくも俺を騙したな。』



民彌が最期に臨んで彼女に投げ付けた、憤り、怨み、呪ひ——其の聲が耳に聞こえ、恐ろしい形相が、絶えず彼女の眼に見えた。

『民彌様、許して下さい、妾も死にます。』

彼女は其の怨靈の前にひれ伏すやうにして云つた。

グラバの家の長椅子の上で眠つてしまつたのが、この悲劇の原因だつた。お才は後でも屢々あの時のことを回想して見た。どうしてあんなにも不覺に眠つて了つたのだから、我乍ら不思議でならなかつた。然し、いくら不思議がつたところで、眠つたことは事實である。眼を醒ました時は夜半過ぎで、而も自分の側にはグラバがゐた。

『妾はあの異人に寝姿を見せて了つたのだ——。』

お才は其のことを思ひ出すと、今でも全身が氷になつたやうな羞恥と、一方には譯の分らぬ腹立ちを感じた。

あの晩の出来事を全部綜合して考へて見ると、何かしら不思議な點があるやうな気が

するが、さて其の不思議の根本は何かと考へて見ても一向核心は掴めないのだ。

今ではもうそんなことすら考へる氣力を喪つて了つた。一刻も早く死んで民彌に詫びをしようと思つた。

海の匂ひがした。いつの間にか海岸へ出てゐた。暗い港内に赤い燈火が高々と點つてゐる。英國の艦隊は去つてしまつたから、それはきつと何處かの國の商船のマストの上に點いてゐる信號であらう。

出島や大浦の異人館からも一點の燈火さへ見えなかつた。空も海も一樣の黒い闇に包まれてゐた。

お才は海の際へ歩み寄ると、直ぐに身を躍らせて飛び込んだ。

×

×

『あッ。』

といふ聲が半丁ばかり向ふで聞えて、其處へバタ／＼人が走つて來た。



『今の水音は、何か飛び込んだらしかつたぞ。熊吉、龕燈で海を照らして見ろ。』  
『へい、宜しうございます。』

後から走つて来たお供らしい男は、水兵などが持つて歩く手提げの龕燈を下へ向けて海の方を照らした。

主人らしい武士は、早くも袴の紐を解き、大小を下僕の手に渡して、衣物を脱ぐばかりにして凝と海面を眺めてゐたが、やがて何か發見したと見えて、

『うん、矢つ張り身投げだ、熊吉、よく照らしてゐろ。』

と云ひ乍ら、衣類をかなぐり捨て、見事な裸體を躍らせて、頭から先へ飛び込んだ。

そして巧みに抜き手を切つて目差す方へ五、六間泳いで行くと、其處へ浮き上つてゐたお才の體を睨り片手で抱へ、片手でもつて樂々と泳いで岸壁の方へ戻つて来て石垣へ絶り付いた。

『熊吉、手を貸せ。』

『へい。』

下僕は龕燈を下へ置いて逆様になつて兩手を差伸べ乍ら、

『旦那様、新造らしう御座いますね。』

『うん、女だ。』

と、下から答へた。熊吉といふ男は、女の帯際へ手を掛けて苦もなく引き上げた。

裸の武士は、石垣に手を掛けて、巨きな體をゆらりと陸へ飛び上らせた。熊吉はグツタリとなつて死んでゐる女を膝の上に載せてゐた。

『熊吉、貴様此の女を背負へ。』

『土左衛門を背負ふんですか。』

『水を吐かせるんだ、背負つたところでうんと逆様になるんぢや。』

背負はせた儘逆様にして、女の背中をグイ／＼手で壓すと、呑んでゐた水を殘らず吐いて了つた。



『もう宜からう、まだ體が温かいから大丈夫助かる、ついでに貴様、其の儘背負つて行け。』

『へい、何處へ参りますんで？』

武士は濡れた體を拭きもせず衣物だけ着て、袴と大小は一緒に丸めて小脇に抱へ込んだ。

『さうだな、女を背負つて隊へ歸るのも變だし、此の邊では大浦のお慶の家が近いから彼處へ行つて頼んで見よう。』

お慶さんの家の前迄来て、閉つてゐる門をドン／＼叩いた。

『何方です。』

『拙者は海援隊の才谷だ。一寸開けて呉れ。』

門は直ぐ開いた。お慶が起きて来て、

『才谷さん、今時分どうなさいました？』

『實は今海岸を通り掛ると身投げがあつたから助けて来たのだ。』

『まあ、それは大變なこと。』

と云ひ乍らお慶は熊吉の背中に負はれて死んだやうになつてゐる女の顔を見てあツとばかり仰天した。

『お前、この女知つてるのか。』

『知つてるどころぢやありません。妾のごく懇意な娘さんです。』

『さうか、そりや又意外な話だわい。』

『まあ才谷さん、よくお助け下さいました、とにかく早く奥へ運んで。』

お慶さんは狂氣のやうに大騒ぎをして、急いで座敷へ蒲團を敷かせ、お才の濡れた衣類を脱がせて新しい衣物を着せて蒲團の上に寝かした。

『才谷さん、大丈夫でございませうか。』 お慶は心配さうだ。

『大丈夫、打つちやいといへも生き回るが、氣附け薬でも飲ましてやんなさい。』



武士は落ち付き拂つてゐる。才谷梅太郎と變名してゐる、海援隊の隊長坂本龍馬であつた。

お才は直きに意識を回復した。それを見るとお慶は嬉し泣きに泣き出した。

(11)

「お才ちゃん、勘忍して下さい、この間の晩のことはお前さんの罪ぢやありません、皆わたしのせゐです。」

お慶はお才の手を執つて泣き乍ら云つた。

「妾だつて、まさかこんな大きな事になるとは思はず、お前さんをグラバさんの處へ留めて置き度いばかりに、あの時葡萄酒に眠り薬を入れて飲まして上げたんでした。それがために藤岡さんは到頭あんなお氣の毒なことになつて了つたし、お前さんにまで身投げをさせるやうなことになつて、全くわたしや申譯がない、藤岡さんの一件以來妾も

藤岡らどんなに心配してゐたか知れませんでした。今夜は幸ひ坂本先生のおかげでお才ちゃんを助けて頂いたからよかつたけれど、お前さんが死ねば、妾も生きちやあゐられませんかよ。」

お慶は、自分が、純情な若い女を翻弄したがためにこんな大きな悲劇を生み出したのだと思ふと、強い責任感にさいなまれて、實際坐しても起つても居られないほど、此の數日は心配して暮らして來たのだつた。

「お才ちゃん、どうか死なうなどといふ了間はやめて下さい、妾はどんな事でもして、あなたに罪の償ひをしますから、妾が悪かつたことは勘忍して下さい。」

お慶は平常の強い氣象にも似ず、後悔の涙に暮れてかき口説いた。

お才は蒲團の上に坐つてうなだれてゐた。

坂本はあれから間もなく歸つた。

お才は、入水する迄は、まるで發狂したやうな氣持で、總ての理性を失つてゐたが、



今は其の時とはまるで異つた氣分で、不思議なほど心が落ち付いてしまつた。暴風雨が静まつて、黒い雲が名残なく飛んでしまつた後の澄んだ月のやうな氣持だつた。

彼女は、お慶さんの懺悔を聞いて始めて疑問が解けた。

(あの晩眠つて了つたのは其のためだつたのか——)

道理でたゞならぬ睡魔であつたことをお才は思ひ返した。けれども、不思議なことに、自分をこれ程の窮地へ陥れたお慶さんの悪辣な手段を知つても、少しも腹が立たなかつた。

民彌と運命を共にする覺悟を決めたことは確かであつたが、考へて見るとそれは自分から望んだことではなかつた。民彌から迫られて餘儀なく承知したに過ぎないのだ。

(一體民彌さんと一緒に駆け落ちをしたらどんなことになつたらう?)

途中で追手に掛つて捕まつて了ふかも知れない。うまく逃げ了せて、民彌が希望したやうに遠い處へ行つて二人で暮すことが出来たとしても、

(わたしはそれで満足するだらうか——?)

と考へてみると、お才は其の生活に満足を感じられるとは思へなかつた。

民彌との戀は眞實の戀ではなかつた。虚偽の戀だ、少なくとも彼女は民彌を餘り愛してはゐなかつた。金を借りたのが縁で義理にほだされて身を任せたのであつたが、どうしたわけか彼女は民彌は心から好きになれなかつた。あれ程自分に對して強い愛情を有つてゐたし、身分や男振りは勿體ないくらいに相手であるにも拘はらず、いつでも心の隅つこに不思議なくらいに民彌に對しては憎惡に近い感情が潜伏してゐたことを、お才は今となつては明確に意識することが出来た。

河野正克に對する氣持と民彌に對する氣持とは、まさに天地霄壤の差があるのだ。正克の爲ならば、立ち所に命を捨てるは勿論、いかなる苦痛でも喜んで堪へ忍ぶことが出来ると思ふが、民彌に對してはそれが出来ない。

お才はふとグラバのことを思ひ出した。グラバが先夜自分に向つて戀を打ち明けた、



あの時の出来事を考へて見た。勿論あの時はグラバに従ふ意志はなかつた。萬一グラバが暴力を振つて迫つて来れば、彼女は死を以て争つたかも知れない。然し、あの場合のグラバに對して、彼女は妙に悪感が持てなかつた。服従することは厭だけれども、男の強い誠實が彼女の心を捉へずにはゐなかつた。そして、彼は實際紳士的でもあつた。

民彌といふ男には、人間に最も大切な眞心が缺けてゐるのではなからうか。お才を愛してゐることは事實であつても、お才の幸福を考へてやる深切はない。彼はいつでも自己の欲望を満足せしむることだけしか考へてゐない男だ。彼は才子であつた。そして身分不相應の遊蕩に耽つた揚句、公金を横領して費消ひ込みをした。そして到頭あんな末路を了へたのである。意志の弱い人間をしてさういふ罪惡を犯させる世の中にも勿論多少の罪はあるかも知れないが、罪を犯す人間にはより以上の缺陷があるのだ。

『輕薄才子。』

と罵倒されても、民彌は苦情を云ふ資格はないだらう。世の中には、民彌に似た才子

で、女を蕩すことに妙を得てゐる人間もあるが、さうして女を籠絡したり翻弄したりすることに惡魔の遊戯以上の何の意義があらう、それをどうして眞實の戀愛と云へよう。

民彌の最後は氣の毒だが、畢竟自業自得である。

お才は、さういふ風に考へたわけではないが、民彌と自分との關係が虚偽であつたことをハッキリと意識した。虚偽の戀愛のために、自分の身を犠牲にしなかつたことを今更後悔する氣にはなれなかつた。約束を破つたことは悪かつたけれども、それは不可抗力だつた。それがために民彌は遂に死んだ。そして彼女は虚偽の戀愛から解放されたのだ。

考へやうに依れば、これはお才のために喜ばなければならぬ結果だつた。民彌と一緒に駈落ちすることは、不自然と不幸より外に何ものも無かつたであらう。

お慶さんの惡辣な手段が、偶然お才の危機を救つたのだ。

民彌を偽り、自分自身を偽つてゐた生活を清算することが出来たのだ。



お才は不思議なほど強い氣持になつた。環境にのみ支配せられて、自分といふものを虚しくしてゐたこれまでの生活が厭はしく、馬鹿らしいやうな氣持がして來た。  
(もつと自分自身を強く生かして行き度い——。)

漠然とした氣持だが、さういつたやうな欲望が彼女の身内に漲つて來た。

お才は、側にゐるお慶さんを見た。お慶さんについては、長崎中の人間が、殆んどめいめい一つ宛位の話を持つてゐた。若し世間あり來りの女だつたら、其の一つの話題を人に語られるだけでも堪へられないやうな悪口や陰口を無數に背負ひこみながら、お慶さんはいとも平然と、世間を見下したやうな態度で、彼女獨特のかうした生活をしてゐるのだ。今では世間の方が彼女に壓倒されて何も云ふことが出來なくなつて了つた。お才は自分に引き比べてお慶さんの偉さを今更仰ぎ見るやうな氣持になつた。

『お慶様。』

お才はハツキリした聲で呼び掛けた。

『何んですの？』

『妾、今日といふ今日はいろ／＼考へました。妾はあんまり弱い女でございました。』

『お才ちゃん、女は皆弱いものですよ。』

『でも、あなたは左うちやございませぬわ。』

『ホホホホ。』お才が突然妙なことを云ひ出したので、お慶さんは不思議に思ひ乍ら、

『妾だつて女ですよ、世間ぢや妾のことを始末に了へぬあばずれと思ふだらうが……』

『否え、妾が今申したのはさういふつもりぢやございませぬ。妾は、世間並みのことが厭になりました、意氣地のない自分に愛想が盡きました。』

『……』

『お慶様、妾は一度水へ入つて死にました。今の妾はもう先のお才ではございません、妾は今迄と別の人間になつて生きて行き度うございます。』



お才の眼は激情に燃え、若い肉體は人生の有らゆる享樂を要求して止まぬかのやうに躍つた。

「お才ちゃん、それで、どうするといふの？」

「お慶様、妾はグラバさんの處へ参ります。」

お才もかう云つて了つてから、自分の聲に驚いた。お慶さんは猶更吃驚した。

「お才ちゃん、それは本氣ですか？」

「わたしグラバさんの處へお世話になつて見たいと、自分で考へました。どんなことがあつても、妾から望んで行くのですから、後悔するやうなことはないと思つた。お慶さんもそれを聞くと急に朗

お才は、それより外に自分の進む道はないと思つた。お慶さんもそれを聞くと急に朗らかな顔になつた。お才の髪はまだ海水に濡れた儘だつたから、鬘を崩して散らし髪でゐた。美事な黒髪が亂暴に顔へ掛つてゐる。眞紅な唇が、生の歡びに顫へてゐる。

(III)

お才は椅子に腰掛けて化粧をしてゐる。

どつしりと重い支那緞子のカーテンを兩方へ引きしぼつてある硝子の窓に、庭園の一部と、其の向ふの可成り遠くの高く秀でた山が映つてゐる。築山の隅の樹木の間から僅かに紺碧の海が覗いてゐる。

楕圓形の鏡の縁は、象牙の彫刻で包まれてゐる。

窓からは朝の光線が差し込んでゐる。

其處へグラバがドアを開けて入つて來た。

「お、お前はこれから化粧をするのかい。」

グラバはパイプを呷へた儘云つた。

「もう直ぐ済みますわ。」



とお才は振り返りもせず答へた。

「急がないでもない、お客さんか来るのは十一時の約束だから。」

グラバは胸のポケットから時計を出して眺めて、それからお才の側から五尺と離れた場所へ態々椅子を持って来て腰を卸した。

「貴郎、そんなに側へ来て見ちや厭ですわ。」

お才は始めて横を向いて云つた。

「見やしない、私は爰に居るだけだよ。」

さう云つて彼は、手に持つてゐた、今朝長崎へ入港した汽船が齧らばかりの上海で發行する『東洋事情』といふ英文雑誌を読み始めた。

東洋事情には、有らゆる東洋の權威が筆を執つて、論文や、紀行文や、特殊の研究を載せてゐた。それは本國イギリスの東洋政策を指導すると云はれる權威ある雑誌だつた。巻頭から三つ目に、

「神が支配する日本」

と題する、グラバ自身の論文が載つてゐた。彼はもう一度それを読み返して見た。

彼は其の論文の中で、日本の特異の國體に就いて詳しく述べてゐる。日本には太古以來皇統連綿として續いてゐる天子が在る。此の皇室が、すべての日本人の信仰の根幹であり、政治上の最高の主權である。ヨーロッパ人が、日本をば偶像を禮拜する野蠻なる多神教の未開國だと思惟してゐるのは謬見である。現在日本の政治の代行者は徳川氏だが、この幕府は過去二百五十年の政權を維持して、現在は過半の勢力を喪失し、封建制度は今や末期に瀕してゐる。日本の知識ある青年達は政權を皇室に取り回す運動に従事してゐる。此の運動は驚く可き勢力と速度とを以て全日本を風靡しつゝある。日本の一大轉換期は目睫の間に迫つてゐる。然るにヨーロッパの諸政府が徳川幕府を相手にして政策的競争をしてゐることは一面少なからず滑稽である——と、外交當局の迂遠さを揶揄した後で、項を改めて、日本人がいかに勇敢で叡智の國民であるかを種々の方面か



ら立證し、ヨーロッパ人が、單に皮膚の色合と風俗習慣を異にするだけの理由で此の國民を輕蔑することは大なる謬りである。將來世界の歴史を作るべき大きな働きをする國は恐らく、天子すなはち神によつて支配されてゐる日本であらう——と、筆を結んでゐる。

グラバは讀み回して満足した。可成り長い論文だけれども、それは彼が體驗した事實と、深く研究した史實に基いた議論だけに空疎な言葉は一つもなかつた。最後の日本の將來に對する暗示は、人によつては誇張と思ふかも知れないが、彼としては實感を吐露したに過ぎなかつた。

お才は毛筋を使つて鬢をふくらせてゐた。グラバは雑誌をテーブルの上に置いて、お才の側へ行つた。

『あら。』

お才は上眼を使つて笑つた。ストーブをたいである此の部屋では冬でも袷一枚で寒さ

を知らなかつた。お才は伊達巻をグル／＼と巻き付けてゐるだけだから、兩手を上げる  
と、内懐ろが廣がつて、まるい乳房が鏡の中に映つてゐた。牛乳の中へ僅かに紅を滴ら  
せたやうな色をした皮膚は、ゴムのやうな弾力を有つて、觸ると大理石のやうにつるり  
と滑りさうに感じられた。

お才は化粧が崩れるのを氣にしながら男の唇を受けた。

『お才、私は今が一番幸福だよ。』

グラバは激しい呼吸をし乍ら云つた。お才の顔は赤く火照つてゐた。

『わたしも——』

『私は一文無しで本國を飛び出して來た青年だつた。私は東洋には素晴らしいものがあ  
ることを知つてゐたんだ、私の考へは的中つたのだ。』

『おや、何がそんなに素晴らしい物がございまして？』

『お前だ。』



グラバはさう云ひ乍ら、織いすんなりしたお才の指を自分の掌の中に揉んだ。  
お才は抵抗出来ない強い愛情に包まれて、自分の體が消えて了ひさうな快感に溺れた。  
ボーイが扉の外から云つた。  
『旦那様、お客様がお見えになりました。』

(四)

燃えるやうなベルシヤ織の絨毯を敷いてある表の客間には、二人の武士が待つてゐた。  
一人は先夜お才を救つた坂本龍馬だが、もう一人の武士はグラバの知らぬ男だつた。

グラバは先づ龍馬と握手して、

『才谷さん、よく入らつしやいました。』  
と云つた。

『グラバさん、此の仁を貴郎に御紹介しようと思つて案内して来たのです。』

かう云つて龍馬は伴れの男の方を見た。其の武士は、齡は三十そこ〜だが、丈が高くて瘦せ形で、小さな眼に鋭い光がある。

『此の仁は、長州の高杉晋作氏です。』

『私グラバです、どうぞ宜ろしく。』

『拙者は高杉晋作。』

二人は握手した。それからめい〜椅子へ掛つた。

『グラバさん、例の造船所の計畫は進行してゐますか。』

『え、大變進行してゐます。近い内にイギリスから技師も來ることになりました。』

グラバは最近戸町の方へ造船所を創設する計畫を立て、奔走してゐた。だから其の事に就いて龍馬がいろ〜質問すると、グラバは丁寧に説明した。

『日本は、攘夷をするにも、開國するにも、もつと西洋の文明を取り入れなくては駄目です。西洋に劣らぬ機械の文明を築き上げることが必要です。私は高島炭坑を創めたの』



も此の目的の爲でした。今度の造船所も同じことです。

「貴下の意見は全部賛成です、然し、何を始めるにも、幕府では駄目だ、だから我れ我れは先づ徳川幕府を倒さうとしてゐるのです。」

「それは貴下方の仕事で、私の關係したことはありません。」

グラバはニツコリ笑つて答へた。其の時龍馬は體を乗り出して、

「グラバさん、貴下は英國から日本へ一番早く来た人で、日本に對して常に好意を有つてゐる人であることを拙者はよく理解してゐる。其處で、すな、貴下がそれ程我國のことを心配して下さるならば、百尺竿頭一步を進めて、我々の仕事を應援して下さいませんか。」

「……………」

「今日高杉君を引つ張つて来たのもそれがためです。實は、ごく秘密の話だが、今度薩摩と長州との聯絡が成立したのです。」

「多分それは才谷さん、あなたの盡力の結果でせう。」

「否や、私の盡力などは問題ぢやない、すべては時節が到来したのです。其處で、近く薩長聯合の倒幕軍を出すことに決定したのですが、我々に取つて最も必要な物は、汽船と、兵器です、これが不足では戦争に勝てない、グラバさん、我々は貴下を信賴してゐる。貴下は我々の味方になつて下さるでせうな。」

龍馬は底力のある、熱の逆るやうな言葉で云つて、グラバの顔を凝と見詰めた。グラバは腕を組んで黙つて聽いてゐた。

沈黙は、五分も、十分も續いた。

「才谷さん。」

「はア。」

「差し當り御所望の汽船と、大砲、小銃、彈藥がどれだけ御入用だか、仰しやつて下さ

50』



龍馬は狂喜して晋作と顔を見合せた。

『それでは我々のお頼みを承知して下さるのですな。』

『承知しました。然し、私はあなた方の仕事は日本の爲にならぬと若し自分が考へてゐたら、たとひ此の場であなた方に殺されてもお引受けしなかつたでせう。』

グラバは先刻入つて來た時持つてゐた『東洋事情』を机の上に廣げて言葉を續けた。

『私は、あなた方と全く同一の意見を此の雑誌へ發表したのです。日本を救ふ道は、皇室の下に政治を行ふより外にないのです。そして、この舊思想の封建制度を廢して、日本國民は一人残らず皇室の人民とならなければならぬのです。』

龍馬と晋作は感激の餘り思はず立ち上つて兩方からグラバの手を握りしめた。

それから三人は、熱心に汽船や兵器のことを語り合つた。其の結果、グラバが近々上海へ出掛けて行つて、大砲や鐵砲を手に入れて來ることを引受けた。

やがて食堂に午餐の用意が出來た。グラバは先に立つて客を食堂へ案内した。

丸鬚に結つたお才は、黒縮緬の羽織を着て、先に食堂へ來てゐた。

『私の妻です。』とグラバはお才を客に紹介して、それから、

『才谷さん、私はあなたの御依頼を承かなければならぬ、もう一つの重大な理由を申し上げることを忘れてゐましたね。』

と云つて呵々大笑した。

お才は顔を赤らめ乍ら龍馬に向つて、先夜のお禮を云つた。

## 天 草

( 1 )

天草の本渡の港には、年中澤山の船が入つてゐる。船着場の邊りは終日漁師や人足達



がガヤ／＼と喚き聲を立てゝゐるが、日が暮れて終ふと反つて其の邊りはひつそりと静まつて、山口川に沿つた色町が急に賑やかになる。川には千鳥が啼いてゐるが、南國の冬は川風もさう寒くは身に當らない。

店先には行燈の看板を掛け、白粉を濃くつけた女が通行人に呼び掛けたり、引留めたりしてゐる。さうした家が澤山並んでゐる町を、編笠を冠つた浪人風の侍がスタ／＼通り過ぎると、一軒の家から飛び出した女が、

『もし、お侍さん、遊んでおいでませ。』

と、聲を掛けた。侍は知らぬ振りをして行き過ぎようとする、女は袂の端を捉へて、

『お侍さん、お遊びなつても宜かですた。』

とすゝめた。侍は一寸足を停めて、

『何をする、放さぬか。』

と静かな聲で云つた。それでも女は放さなかつた。

『お上りませよ。』

侍は女を叱らうとしたらしがつた。向き直つて、初めて女の顔を見て、

『あ！』といふ聲を發した。

女の方でも、編笠の中の顔を覗いて、同じ様に驚いた。

『おみさどのではないか。』

おみさは二足三足逃げ掛けたが、何んと思つたか又立ち戻つた。

『河野様、お久しうございます。』

『そなた、どうしてこんな處へ來てゐるのぢや。』

正克はおみさの風體から推測して合點がいかないらしがつた。

『河野様、ともかくお上りませ。』

正克は斷わつて、振り切つて立ち去ることは出来なかつた。



『うん。』と云ふと、おみさは嬉しさうに先に立つて店の方へ飛んで行つた。

『おみさ、お客さんか。』

『はい。』

『それぢや、二階がよかたい。』

と、其の家の亭主は此の邊では珍らしい武士のお客に注意深い視線を送り乍ら云つた。

『おみさどの、どうした譯ぢや。』

おみさは、源七にかどはかされて此の天草へ連れて來られた揚句、此の家へ叩き賣られた顛末を話した。正克は愕いた。

『それは何時のことぢや。』

『去年の夏でござんした。』

おみさはもう半年以上この厭ふべき地獄の生活をしてゐるのだ。

『一體そなたは、どうして四郎島を出て來たのだ、父ごや母は達者で暮してゐるか。』

と正克は尋ねたが、おみさは黙つてゐた。

『あなたが戀しくて、跡を追つて家出をしたのです。』

と云つて終ひたい言葉が、喉の處まで來てゐて、どうしても口へ出なかつた。恥かしいやうな、腹立たしいやうな氣持で、自分のこの氣持が正克に通じないのが口惜しくもあつた。然しそんな恨み言も、眼前戀しい正克に逢つた喜びで何處かへケシ飛んで了つてゐたのだ。

彼女は、最初爰へ連れて來られた時の悲しかつたことを思ひ出して泣いたけれども、其の泪はいつしか乾いてゐた。

正克は、おみさがさう悲しくもないやうな顔をしてゐるのを見て妙に感じた。

『あなたは、あれから何處にお出でなされました。』

『拙者は方々逃げ廻つてゐた。尤も今でもさうだが……。』

おみさは此の男の身の上を思ひ出して急に心配になつたが、其の心配のために今夜の



喜びを消したくはなかつた。どうしても正克を爰へ引き留めなければならぬと思つた。

『河野様、今夜はお遊びになつても、よかですたい。』

とおみさは甘えるやうな、願ふやうな云ひ方をした。正克には其の言葉が、彼女が毎晩云ひ慣れてる職業的な言葉のやうに響いた。然し實際は、おみさとしては其の言葉の中に殆んど一生涯の希望を打ち込んでゐるのであつた。おみさはかういふ場合にもつと婉曲に、優美に、自分の意志を傳へる言葉があることを知らないので、毎晩云ひ慣れてゐる言葉で云つたのに過ぎなかつた。

去年の春正克が四郎島にゐた時からではやがて一年近い月日が経たうとしてゐるが、おみさの様子はあの時と今では殆んど別人のやうに變つてゐた。たゞ無邪氣な眼だけは元の儘であつた。それは彼女がこんな生活の中に抛り込まれても依然として本來の善良さを失つてゐないことをよく證明してゐた。

彼女は、ともかくも美しくなつてゐた。白粉やべ、ニをつけることを覚え、美しい着物を

を着て、さうして男に媚びることを知つてゐた。

正克はすべてが呪はしい氣持だつた。おみさがかうなつたことが彼自身から起きたことだといふことは知らないが、此の儘冷酷に振り切つて行つてしまふことは何となく心が咎めるのだ。

『あなた、お酒召し上る？』

『うん、飲まう。』

酒でも飲むより外に手段はない。

おみさは下へ行つてやがて酒肴をとゝのへて上つて來た。

『は。』

と云つて盃を正克に持たせてお酌をした。まづい酒だけれども正克は辛抱して二、三杯飲んだ。

『妾にも、お盃を下さいませ。』



「お前も飲むか。」

「ホホホ、お酒を飲まんで、こんげん商賣は出来んもの。」

正克は盃をやつて酌をしてやつた。おみさはそれを非常に嬉しいことに思つて飲んだ。

「さあ、今度はあなた。」

「お前は半分變つたあな。」

「そりや、こぎやん商賣してゐたら變りますたい、仕方もございます。でも、神様はどんなことでも許して下さるけん。」

さう云つておみさは護り袋のやうに見せて頸へ掛けてあるクルスを一寸引き出し、胸の前で十字を切る眞似をした。

正克はおみさに對して、今迄氣が付かなかつた強い愛情が燃え上るのを意識した、眼の前にゐる女は賤しむべき賣笑婦ではなくて、矢張りあの四郎島に育つた可憐な切支丹

娘だつた。

(11)

店の奥の間では、此の家の亭主と、蝮の源七が、頻りに話し合つてゐた。

「ハテナ、侍の客つて、其の侍はどんな男でしたい。」  
と、源七が訊いた。

「どんな男だか編笠を冠つた儘上つて了つたから、顔は見なかつたが、何んでも若い侍のやうでしたよ。」

「そいつあことによるとお尋ね者の河野正克といふ奴かも知れねえ。親方、一寸二階へ行つて覗いて來ても宜うがすか。」

「それあ構はねえが、若し人違ひだと悪いから、覺られぬやうに氣を付けなせえよ。」

「そんなへマをする源七ぢやねえつてことよ。」



源七は直ぐに抜き足をして二階へ上つて行つたが、間もなく顔色を變へて下りて來た。  
『親方、矢つ張り俺の目星は外れなかつた、俺あ直ぐに九兵衛親分へ此の事を報らせて  
來るから、どうかあの侍を逃がさねやうに頼みますぜ。』  
『それあ合點だが、家でドサをやられて、若し女に傷でも付けられるやうなことがある  
と困るからな。第一お前がハメ込んだ女ぢやねえか。』  
『大丈夫だ、お前さんそこへ迷惑を掛けるやうなことはしねえ。』  
源七はさう云つて慌てゝ表へ飛び出した。  
二階では、正克が歸り支度をしてゐた。  
『正克様、まだお在なつても宜かですたい。』  
『さうはいかぬ、わしは愚圖々々してはゐられぬ體だ。』  
『これでお別れ申したら、今度は何時お目に掛れるぢやるか、のうし。』  
おみさは一分間でも永く現在の幸福に浸つてゐたいと思ふ以外に何物もなかつた。こ

れきりもう二度と逢へないかも知れないやうな氣がして、只無闇に悲しかつた。  
正克はこんなことになつたことを一方では後悔し乍ら、  
『おみさ、近い内に必ず便りをするから、それ迄待つて居れ。』  
と氣休めを云つた。  
『きつとお便りを下さいますか。』  
『うん、必ず便りをする。』  
『それでは、お待ちしとりますけん。』  
と、おみさは力なく云つて諦めた。  
正克は二階で編笠を冠つて外へ出た。おみさが表へ送つて出て、  
『ぢや、きつとですよ。』  
と、背後から云つた。正克は編笠で軽く頷いて向うへ立ち去つた。  
正克は、此の島に潜伏してゐる同志を尋ねて來たのだつた。



彼は海沿ひの道を歩いて行つた。此の邊は晝間なら天草上島を始め有名な天草松島を前面に取り入れる風景絶佳の地だが、月はあつても夜眼には模糊としてすべてがボーと霞んでゐるばかりだつた。

今別れて来たおみさの肌の香が正克の鼻に残つてゐた。

奇しき邂逅はせ——それを只一場の運命の戯れだとしてしまふことは出来ないやうな氣持になつてゐた。

うつとりとそんな思ひに耽り乍ら歩いてゐる正克の背後から金剛力でムンズと組み付いて来た者があつた。

『来たなツ。』

と思つた、瞬間、編笠がユラリと揺れて、一人の人間が、二間程先へどうと投げ出された。同時に彼の編笠も飛んだ。

四方八方の物蔭から、大勢の捕手が、バラ／＼と飛び出した。

『御用だ。』

『御用だ。』

と口々に叫ぶのみで遠巻きに取り巻いてゐる。

『えゝツ、意氣地なし、一度に掛らぬかツ』

と役人は叱咤した。

五、六人一度に飛び掛つて来たのを正克は前後左右に蹴倒し、投げ倒し、漸う一方に活路を開いて逃げ出した。

『それツ、遁がすなツ。』

捕手は追跡した。

正克は何處をどう走つたか判らぬが、とにかく一時捕吏の眼界から脱する處まで逃げのびた。其の時氣が付いて見廻すと、高い土塀を繞らした立派な屋敷があつた。彼は深く考へてゐる暇もなかつたが、いきなり、



「ヤツ。」

と聲を掛けると、塀の瓦に取り付き、次の瞬間には、軽々と身を躍らして邸内に飛び込んでゐた。

(三)

正克が薄月夜の中であたりを見廻すと、それは誰人の住居だか判らぬが、豪壯眼を驚かすやうな建物があつた。母家は二階造りで、破風屋根は弓のやうに反りを打ち、高欄を取り附けた支那風の建築で、夜だからはつきりとは分らないが、其の高欄や柱は漆塗りのやうに見えた。高臺から海を見晴らす庭園は大部分自然の地形を利用してあつて、大岩石の上に形の好い赤松が枝を張つてゐるかと思ふと、海の方へ突出してゐる岩石の上には矢張り唐風の亭が立つてゐたりする。

「一體何者の住居だらう——？」

と、正克は暫し驚いて眺めてゐた。天草あたりにこんな豪奢な生活をする人間があらうとは思はれない。

彼は、身の危険さへ忘れる程、好奇心に驅られた。家の内はまだ寝てしまつてはゐないと思へて、處々から明りが漏れてゐた。正克は忍び足で邸内をあちこち歩いて見た。

と、思はぬ處から光線が帯のやうに戸外へ流れ出てゐた。戸が僅か開いてゐたのだ。

「おやツ。」

と思ひ乍ら、恐々近付いて、そつと中を覗いて見ると、湯気がモヤ／＼立ち昇つてゐた、それは湯殿だつた。

一人の女が湯に入つてゐた。たゞそれだけなら別に驚きもしないが、よく眼を据ゑて見ると、そこには異常なる光景が展開されてゐた。

それは、大名の風呂場でもこれ程贅澤ではあるまいと思ふくらゐ、浴槽でも、流し場でも、天井でも、善美を盡してゐたが、就中驚くべきことは、其の一方の壁面がギヤ



マン板で以て圍はれてゐて、其の中には一杯水が流れて居り、而も水の中には魚が泳いでゐた。それは鹹水だと見え、中にゐる魚は海の物ばかりで、鯛、平目、こち等が無數に、丁度海の中にゐる時と同じ様に勢よく泳ぎ廻つてゐるのである。

のんびりと湯に浸つてゐるのは、年の頃三十位に見える、雪のやうに白い皮膚をもつた女だつた。顔も體もやゝ肥り過ぎてゐるくらゐ美事な肉付きである。澤山の髪を無造作に束ねてゐる。

明るい洋燈の光が、さうした光景を照し出してゐた。

女は時々ジャブ／＼と湯の音をさせるけれども、別に洗ふでもなく、浴槽の縁に頭を凭せ掛けるやうにして、やゝ圓味のある眼をうつとりと前の方へ投げてゐる。玻璃の中の魚も見馴れて別に珍らしくもないといつた風に。

正克は我れと我が眼を疑つた。

(一體、此の女は何者だらう——?)

此の豪壯な建物と云ひ、想像も出来ない贅澤な浴室の光景と云ひ、現に湯に入つてゐる女と云ひ、それは何一つとして意表に出ないものはない。彼は夢を見てゐるか、それとも狐狸にばかされてゐるのぢやないかとさへ思つた。

けれども、暫らくすると彼は、武士にあるまじき自分の行爲に氣が付いて思はず顔を火照らせ、一步後へ退らうとした時、彼の背後で、

『ウオ——』

と唸る聲がした。吃驚して振り返つて見ると、コハいかに、仔牛程の、耳の垂れ下つた犬が、怪しの者と見て、まさに飛び掛らうとしてゐるのだつた。

『あツ。』

低く叫んで、二間ばかり彼方へ飛んだ。犬は猛然として迫つて、隙があれば噛み付かうとして齒を剥いて吠えた。正克は困惑したが、眞逆に犬を斬るわけにもいかず、近寄らば一と撲ちと、拳を固めて振り上げると、犬の方でも其の氣勢を察したと見えて急に



は飛び掛らず、一間餘り離れたところから頻りに吠えてゐる。

やゝ暫らく犬と争つてゐると、突然雨戸が一枚サラリと開いて、一人の女が姿を現はし、

『ジョン、ジョン。』

と、犬の名を呼んだ。其の聲を聞くと犬は急に氣勢が和いで、主人の方を見て尾を振つた。

女は、庭下黙を穿いて下りて来た。

『ジョンや、何をするのでえ、お前はお馬鹿さんだよ。』

と、女は平然たる聲音で云ひ乍ら犬の首輪を持つて引き寄せ、

『あなたは、何方でございます？』

と正克の方へ云つた。

正克は其の女が今し方風呂へ入つてゐた女であることを知つた。

『拙者は通り掛りの者でござるが、仔細あつて、當家の庭園へ無断で侵入致したのぢや。』

『其の仔細と仰しやるのは、どういふ事でございます？』

正克は正直に云ふはうがいと云つた。

『拙者は犯せる罪があつて、官の追捕を受けてゐる身分ですが、先刻數多の捕吏に追はれ、遁げるに路なく、思はず當家の堀を乗り越えて入つたのです。何卒お許し下された』

『して、今後何處迄お出でなされます。』

『今津と申す處に知人が居る筈ですから、其處迄參らうと存じたが……』

『あなたのお名前は？』

『拙者は薩州浪人河野正克と申す者です。』

『えッ！』



女は非常に愕いた。

『拙者の名前を御存じか。』

『は。』

『どうして知つて居られる？』

『それは譯があつて、お名前だけは存じて居りましたが、河野様、何はともあれ内へお入りなさいませ。』

と云つて女は正克を家の方へ導いた。正克は不思議な氣持がしながら後へついて行くと、女は今出て來た處から正克を上へ上げて、立派な座敷へ通した。其處には圓い行燈が置いてあつた。

女は正克を上の方に坐らせ行燈を横にして對き合つて坐つた。

『罪のある拙者を、かやうに家の中まで入れて、萬一御迷惑は掛らぬか。』

『ホホホホ、何んの迷惑致しませう、爰はわたしの別荘で使つてゐる者は、氣の許せる

下婢と爺やばかり、誰に遠慮もいりませぬ。』

『然し、上役人等が尋ねて來ると面倒でござらうが。』

『なんのあなた、此の邊の田舎役人の一人や二人、何時來ても心配はござんせん、わたしがいゝやうに云つて追ひ歸してしまひますから御安心なさいませ。』

『全體そなたは、何んといふお方ですか身分と名前をお聞かせ下さらぬか。』

『ホホホホ、さう改まつて訊かれるとお恥かしうございますわ、多分あなたも、妾の名前だけは御存じの筈、わたしは長崎大浦の、慶と申す女でございます。』

『そなたがお慶どのか——』

正克は思はず眼を睜つた。

『去年の春、銅座のお才ちゃんに、あなたを隠匿つてくれと頼まれ、お引受け申したところが、途中でひよんなことになつて、到頭あなたは行方知れず、お才ちゃんも妾もどんなに心配したか知れませんでした。それが爰でお目に掛るとは、矢つ張り御縁があり



ましたねえ。』

『とは申し乍ら實に意外千萬、お慶どのにはどうして此處に居られたのです。』

『それは貴郎、この天草は妾の生れ故郷、故郷忘じがたしとやらで、こんな處へ別莊を造りましたが、冬分は暖かで宜うござんすから、時々長崎から寒さしのぎにやつて参るんでございますよ。女のくせに生意氣なことを云ふやうですが、この天草では、お代官よりも、妾の方が幅が利きますから、此處に入らつしやる間は、金輪さい御心配は要りませぬ。』

お慶さんは初めて手を叩いて下婢を呼んだ。

(四)

『河野様、まあ一つ召し上れ。』

お慶さんは自慢のフランスの酒を出して相手にすゝめ乍ら自分も飲んだ。正克はすゝ

められるまゝに飲んだ。彼は運命の成り行きに抵抗しない習慣が付いてゐた。酒は程よく其の體を温めた。

正克は、お才のことを知りたくなつた。

『お慶どの、あのお才といふ娘は達者で暮して居るでせうな。』

『お才ちゃんですか——』

お慶さんは『はッ』としたやうな氣持で正克の顔の色を見た。然し正克は明かに何も知らないのだ。

グラバの處へ行つてゐるお才とは、長崎に居れば殆んど毎日のやうに顔を合せる機會があつた。今では、お才もあの生活に慣れて、十分幸福であるらしく見える。けれどもいまだに正克のことが彼女の心の底にこびり付いてゐることをお慶さんは女同志の感情で想像することが出来るのだ。お慶さんはそれを思ふと急に妬ましいやうな氣持になつた。



(此の人の方でも、お才のことを想つてゐるのかしら?)

と考へた。放浪生活をしてゐるにも似合はず何處となくのんびりとしたところある此の青年の、厭味のない風貌が俄かにお慶さんを惹き付けた。お慶さんの身内には持ち前の奔放な血がうづき乍ら流れ出した。

(お才は今の儘で幸福なんだ、わたしが此の男を奪つたつてお才には何の關はりもないぢやないか。)

お慶さんはそんな風に自分勝手に考へた。そして正克にお才のことを云はうか云ふまいかと躊躇したが、到頭知らせないことに決心した。

「わたしもあの人とはちつとも會ひませんが、別に變つたこともございますまいよ。」と、お慶さんは白つばくれて云つた。

「あなたお風呂をお召しなさいませんか、……妾が入つたあとでもお厭でなかつたら。」正克は先刻のことを思ひ出して赤くなつた。

「お召しなさいませよ、さうすると温かになりますから。」

とお慶さんが頻りにすゝめるので、

「では頂戴ませう。」

と云ふと、お慶さんは召使も呼ばずに自分で正克を例の豪華な風呂場へ案内した。正克はお慶さんの云ふ通りになつて、衣物を脱いで風呂へ入つて、好い心持になつて鯛や平目が泳ぎ廻るのを眺めてゐると、もう其處に居ないと思つたお慶さんが入つて来て、

「あなた、お背中を流しませう。」

と云つた。

## 雲仙嶽

(1)



普賢岳には白雲が去來してゐた。

其の邊は海拔四千尺を越えてゐるのでこの盛夏の眞晝でも空氣が冷えくしてゐる。

四邊は火山岩の累積で、其の上に、樅、榎、楓等の樹木が、林を作つてゐる。

『何んといふ素晴らしい景色だらう？』

人々は、頂上に近い仁田峠の上の平地で休憩し乍ら、交る交る讚嘆の聲を發した。

一行は、グラバ夫妻と、スミス夫妻、それに芳松といふボーイと、山案内に附いて來た強力が三人程と、それだけであつた。一行は其處で晝飯の辨當を開いた。

脚下には、無數の山や谷が重なり合つて、それが段々遠くなりつゝ次第に低くなつてゐた。其の半島全體を、芒洋たる海原が取り圍んでゐる。

南方には、天草島が、天涯の雲のやうに簇り横たはつてゐる。

それは全く、云はうやうやない雄大な景色だつた。

『私はこんな佳い景色を初めて見たよ。』

グラバは雲仙まで伴れて來てゐる陳といふ廣東人のボーイが作つたサンドウキツチを口に入れ乍ら、隣に並んで藪の上に脚を伸ばしてゐたお才に向つて云つた。

『ほんとに佳い景色ですわ。』

お才などは、これまで長崎以外へ一步も出たことがない人間だから、地球の三分の二を歩き廻つたグラバに比べる時には、其の見聞の程度においてまるで問題にならないけれども、矢張り此の雲仙の風景には驚くより外はなかつた。

『でも貴郎、イギリスにも景色の佳い處がありません。』

とお才は少し経つてから云つた。

『それはある。けれども日本の景色とはまるで違ふよ、日本のやうなかういふ景色は世界何處へ行つたつて見られないネ。』

『さうですかしら？』

温泉場から二里もある險阻な山路を歩いて來たので、お才は顔にも手にも好い血色が



漲つてゐた。睫の濃く澄んだ眼は、遠い海の方に注がれてゐる。彼女は何か別のことを考へてゐるやうに見える。

グラバは其の横顔をチラと見乍ら、思ひも寄らないことを考へた。

(日本の風景は火山が生み出した風景だ、それと同じやうに、日本の女の情熱的な美しさも、矢張り火山の影響を受けてゐるのだからかもしれない。)

グラバは一大発見でもしたやうな氣になつて、

『ミスター・スミス』と呼び掛けた。

三間ばかり離れた處で、グラバ達とは反対の方を向いて、景色を眺めるといふよりも妾のお磯と何かキヤツ／＼と笑ひ巫山戯てゐたスミスは、首だけ後ろへ向けて、

『何んですか、グラバさん。』

と英語で聞き返した。するとグラバも英語で今自分が考へたことをスミスに話した。そして火山と人類との神秘的な關係について其の場で思ひ付いた議論を附け加へて語つ

た。スミスは、

『ハハハハハ。』爆笑した。そして彼はグラバの説に對してかう云つて答へた。

『風景に對しては僕は全くあなたと同意見です。そして、女性の問題に對しては、特にグラバ夫人の場合に限つて賛成するとしておきませう。』

グラバも哄笑した。

『何んですの、今のお話は？』

お磯は自分の旦那に訊いた。

『お前と僕と仲が良過ぎるといつて、グラバさんがやきもちを焼いたんだ。』

『だつて、グラバさんとお才ちゃんのだつて、あんなに仲が良いぢやありませんか。』

『人間は、とかく他人の物が好く見えるのだよ。』

一時間ばかり其處で遊んでから一同は温泉場の方へ下つた。

村が近くなると、邊りの野原には、桔梗、刈萱、女郎花、其他名も知らぬ花が咲き



亂れてまるで花園のやうだつた。

グラバ達は、一軒の温泉宿を借り切りにして此の盛夏を其處で過す方針だつた。日本人は避暑といふことを知らないで、暑中は此の涼しい温泉場は殆んど客はなかつた。

此處へ來てから一週間ばかり経つと、グラバは突然長崎に重要な用事が出來して歸らなければならなくなつた。それはどうしても自身で行かなければ解決の付かぬ問題だつたので、一同を此處へ残して自分だけ長崎へ行つて來ることにした。するとおオオも一緒に行くと言つたが、グラバは直ぐに用事を済まして此處へ引き返して來るから、辛抱して待つてゐるやうにと云つた。

(スミスさんもお磯さんも居るから淋しいことはない。)

おオオは獨りになることは何んとなく不安だつたけれども、結局さうするよりほかに仕方なかつた。

或日グラバは山駕籠に乗つて雲仙嶽を下つて行つた。

(11)

島原半島の突端、天草灘に面した處に、口之津といふ港がある。それは長崎を小さくしたやうな港だ。元來此の港は長崎より早く開けた處だが、長崎が開けて後は唐船も蘭船も悉く長崎へ入つてしまふので、口之津の方はわづかに近海だけの港として永世取り残されてしまつたが、然し天草や茂木との聯絡があり、漁船も澤山入るので相當に榮えてゐた。

今しも天草から着いた客船があつて、澤山の人が船から上陸した。其の中に一人の武士が交つてゐたが、武士は一番後から陸へ上つて、漁師町をソロ／＼歩き出した。丁度眞晝で、暑い太陽がカン／＼照り付けてゐる。

「一せんめし。」と書いた家があつた。武士は空腹だつたと見えて其店へ入つて行つた。「許せ。」



「ハイ、お出でました、どうぞお掛けなさいませ。」

武士は店先の端寄りの方へ腰を掛けた。亭主は番茶を汲んで持つて行き乍ら、

「旦那様、今日は大變照り付きますな。」

「暑いなう。」

「何を差し上げます。」

「何でもよい、有り合せの物で飯を出して呉れ。」

「へい、御飯のお菜には鱈の煮付か、鯉の新しいのも御座ります。」

「それでは鱈の煮付で飯を貰はう。」

「畏りました。」

亭主は直ぐに膳を拵へ、皿に鱈の煮付と茄子の煮たのを附け合せて持つて行つた。武士は其の時はじめて冠つてゐた編笠を取つた。それは河野正克だつた。

正克は右の眼に紅絹の布を當て、糸でそれを押へてゐた。其の繻帯は取らずに、何んとなし不自由らしく食事を始めた。

亭主は離れた處から、

「旦那様はお眼が悪いので御座いますか。」

「うん、眼病で困るのだ。」

「お痛みで御座いますか。」

「痛むのだ。」

「それはお困りで御座いませうな、これからどちらへお越しで御座いますか。」

「實は此の眼病を治したくてな、この口之津に大變上手の眼醫者があると聞いたから、

天草の方から態々やつて來たのだ。」

彼は此の春頃から眼を病み始めたが、段々悪くなつて、今では右の眼は夜晝劇しく痛むのだつた。

亭主は其の話しを聞くと氣の毒さうに、



『それは旦那様お氣の毒なことを致しました、其の眼醫者は去年死んでしまいました。』  
『何、死んだ——？』

『ハイ、大層名高い眼醫者で、熊本や長崎からも眼の悪い人が来るくらいで御座いました。』  
『が、去年五十幾つかの齡で急に死んで了ひました。』

正克はガツカリして了つた。ひどく力を落した。

すると亭主は暫く考へてゐたが、

『旦那様、眼病を治すなら、眼醫者でなくても、もつと宜い處が御座いますよ。』

『何、眼醫者より宜い處があるとは？』

『ハイ、それは雲仙の温泉で御座いますがね、彼處にはいろ／＼の湯がありましてね、

其の中の薬師の湯と云ふのへ入湯すると、どんな眼病でも治るさうで、此の邊では昔から大層信仰して居りますよ。』

『亭主、それは眞か。』

『本當で御座いますとも、歎くなつた眼醫者でさへさう申しました、俺の眼薬よりあの温泉の方がよつほど確かだつて。旦那様、私に騙されたと思つて、雲仙へお出でになつて見てはどうで御座いますか。』

眞に盲龜浮木の譬、正克は急に元氣づいた。

『これはよい事を教はつた。然らばお前の云ふ通り雲仙へ登つて見よう。處で、雲仙へ行くにはどう行くのが順路かな？』

『小濱から登る道と、島原から登る道と御座いますが、此處からでは矢張り小濱へ廻つて入らつしやる方が幾らか近うございませうな、小濱迄は駕籠でも、船でもございませうよ。』

『左様か、ではさういふことに致さう。』

と亭主と話しをし乍ら食事をしてゐる時、表から、

『御免よ。』



と入つて来た男がある。

「親父つあん、焼酎を一合呉んな。」

尻をクルツとまくつて、正克から一疊程離れた處へ腰を掛けて焼酎を飲み乍ら、何氣なく正克の顔を見て「おやツ。」といふ思ひ入れをした。それは四郎島の無頼漢釜四郎だつた。正克の方では、釜四郎の顔は知らない。

正克は亭主に禮を云つて飯屋を出た。

(三)

褐色の岩がゴロ／＼してゐる廣い河原のやうな處から、一面にガスが噴出してゐた。

其の音が物凄く鳴つた。山の中腹にも方々からガスや煙を噴き出してゐる。

「地獄——」

お才は眞個の地獄といふ處を想像して戦慄した。

林の中では不思議な鳥の聲がした。

一人の女の子が山の方から薪を背負つて下りて来た。道でお才に逢ふと、

「こんちは。」と云つて叩頭をした。

十二、三の娘で、日に焼けた顔と眞つ黒な手をしてゐたが、圓らかな眼が黒く澄んでゐる可愛らしい子だつたから、お才は其の子に物を云つて見たくなつた。

「ねえちゃん、其の薪を自分で採つて来たの？」

「あい、さうです。」

「えらいねえ、自分で薪を採つて来るなんて。」

「こんなこと何んでもありません。」

と云つて女の兒はニコツと笑つて再び歩き掛けた。薪が重たさうにお才には見えた。

お才は其の子と並んで歩いた。

「お客さんは長崎からおいでなさいましたかね。」



『さうですよ。』

『長崎つて好か處でござんせうね。』

『ねえちゃん長崎知らないの?』

『わしら、小濱より遠いとこ知りまつせん。』

と、娘は笑つて云つた。

(此の娘が年頃になつたらどういふ生活をするのだらう?)

お才は一寸そんなことを考へて見た。其の時向うからスミスとお磯が手を引き合つて例の通りキヤツ／＼と巫山戯乍らやつて来た。

『お才ちゃん、何處へ行つてたの?』

『山の方へ歩いて行つて見たの。』

『獨りで行つて歸つて来ないから、心配して探しに来たのよ。』

『さう、有難う。』

スミスは離れてニコ／＼笑つてゐた。

薪を背負つて来た小娘は、知らぬ間に何處かへ行つてしまつた。

其の宿には樋で内湯が引いてあつた。日が暮れるとお才は所在なさに温泉へでも入るより外はなかつた。

長崎での明るい華やかな夜に慣れてゐるお才は、この雲仙の山上の夜の淋しさは全く堪へられないものだつた。其處には大自然の生活だけあつて、人間は、暗い灯の側へ飛んで来る小さな虫と殆ど變らぬものゝやうに感じられた。

お才は晝間見た地獄の景色を眼に浮かべたりした。

(死ねば地獄へ行くのだらうか——?)

今日の地獄よりもつと恐ろしい繪で見る地獄の光景を想像して子供らしい恐怖に囚はれた。すると、死んだ藤岡民彌のことが思ひ出された。民彌の怨靈がかうしてゐる間も自分の身邊に付き纏つてゐるのではなからうか……。



燈火の油が盡きて來たが、お才は寢付かれなかつた。様々の妄想が温泉場の地獄から立ち昇る白煙のやうに朦々と頭の中に立ち籠めてゐた。

お才はトロ／＼と睡つたと思ふと、悪夢にうなされて眼が開いたり、側にグラバがゐると思つて夢中で空にしがみ付いたりした。

翌朝お才は寢坊をした。起きた時は大分陽が昇つてゐるやうだつた。然し戸外には霧が流れてゐた。朝飯の時スミスが、

『明日あたりはグラバさんが歸つて來るでせうよ。』

と、慰めるやうに云つた。お才は只ほゝ笑んだだけだつた。

其の朝もお才は一人で散歩に出た。すると昨日の女の子にバツタリ道で出逢つた。

『ねえちゃん、お早う。』

とお才の方から云ふと、女の子も親しみ深く笑つて、

『お早うございまつす。』と云つて丁寧に叩頭をした。

『今日は薪を採りに行かないの？』

女の子は返事をする代りに頭を横に振つた。

霧は地上を這つてゐた。時々切れ間があると、太陽が其處だけ鮮やかに照らした。

女の子はお才の後へ附いて來た。

山の断面から處々ガスを噴出してゐる谷間のやうな處を進んで行くと、岩石ばかりの

山の根際に屋根のやうな物が見えた。

『ねえちゃん、あれは何？』

お才は霧の中からそつちを指さして訊いた。

『あれは薬師の湯でございまつす。』

『彼處にも温泉があるの？』

『あい、あの温泉は眼の病の人が入るお湯でございまつす。』

『さう。』



側へ行つて見ると、岩石の天然の湯壺があつて、其處にお堂のやうな古い小屋が立つてゐた。

『こゝのお湯、熱くないの？』

『え、冷たいお湯ですよ。』

と女の子は云つた。

小屋の中まで霧が流れ込んでゐた。

お才は好奇心を起して中を覗いて見ると、誰も人はゐまいと思つたのは、湯壺の中に人が入つてゐたので、吃驚して止めた。

お才は女の子をつれてもつと奥の方迄歩いて行つて、暫らく経つて歸つて來ると、先刻の湯の小屋から出て行く男があつた。まだ霧が晴れないのでよくは分らないが、武士らしい若い男で、刀を差してゐた。

眼が悪いからだらうが、トボ／＼した足取りで歩いてゐる其の男の後姿が、妙にお

才の眼に残つた。

(四)

グラバは長崎の用件を解決するとすぐ雲仙へ引つ返さうとした。お才を一人にして残して來たことがひどく氣に掛つて一刻もかうしてゐられないやうな焦燥を感じた。そこで早駕籠を仕立て、朝の暗いうちに長崎を出發した。然しいくら急いだところで今日中に雲仙迄登ることは困難だが、せめて小濱温泉迄行き着けば、明日は山を登るだけだから譯はない。さうすれば明日の午前中にやす／＼とお才の顔が見られるのだ。

日見峠へ掛つたのは、まだ夜が明けたばかりだつた。駕籠昇は峠に達した處で一と息入れると、又もや走り出した。山蟬がさかんに鳴いてゐる。

突然、走つてゐた駕籠が停つた。駕籠昇は異様な叫び聲を擧げた。

『何か起つたな。』



グラバは突嗟にさう思つて、駕籠の横へ頭を出して見ると、五、六名の浪人らしい武士が駕籠の行く手に立ち塞がつてゐた。

『おい、其の駕籠を卸せ。』と、一人の武士が命令した。

『へい、へい。』

駕籠舁は何んの事だか解らぬが、恐々命ぜられる儘に駕籠を地に卸した。武士はドカドカと駕籠の左右に殺到した。

『グラバ、出ろ。』

と、頭らしい、大髻に結つた武士が駕籠の中へ向つて呶鳴つた。

グラバは駕籠から出た。然し彼は平然としてゐる。

『あなた方は何んな御用で私を留めたのですか。』

『我れ／＼は貴公の命を貰ふのだ。』

『私の命を——？ それはどういふ理由ですか。』

『貴公は我國の政治を攪亂する怪しからん人物だ、貴公のやうな者を生かして置いては國家の爲に成らんから、我れ我れの手で誅罰するのだ。』

『私が日本の政治を攪亂したといふ證據があるのですか。』

『證據は幾らでもある、貴公は長州へ軍艦を賣り、武器を賣つた覚えがあらう、それでも日本の政治を亂すとは思はんか。』

『……』

『もうよい、殺つちまへ。』

片側の三人が刀へ手を掛けた瞬間、グラバは砲丸のやうな速力で一人を後へ突き倒して逃げ出した。

『それッ。』

刺客はバラ／＼と追ひ掛けた。グラバは十間ばかり逃げた處で、後を向いて拳銃を一發放つた。



「あッ。」

其の彈丸は誰にも命中しなかつたけれども彼等は拳銃の音に愕いて一寸たじろいだ。其の際にグラバは二十間ばかり逃げ延びた。

敵は再び追ひ迫つた。口々に何か罵つてゐる。距離が接近したところでグラバは又一發放つた。然し敵は素早く地面に體を伏せた。

グラバは、かうして逃げてゐても際限がないと思つた。結局彈丸が盡きて了へば其の時は殺られて了ふのだ。それならばいつそ堂々と戦つてやらうと走り乍ら考へてゐると山の根方に大きな岩石が飛び出してゐる場所を見付けたから、之れ屈竟の陣地とばかり其の上へ駆け上つて、拳銃を下へ向けて近寄らば撃たうと狙ひを定めた。

かうなると浪士達もうかと近寄れないから、遠く離れてガヤ／＼罵つてゐる。やゝ暫らくかうして對抗してゐた。

すると突然、パン／＼といふ銃聲が聞えた。浪士達は二三人瞬く間に斃された。

あッと愕いてゐる時、長崎の方向から一隊の兵が走つて來た。

残つた浪士は愕き慌て、一齊に山へ逃げ込んでしまつた。一名の隊長が馬に乗つて二十名ばかりの兵を引率して其の場へ駆けつけた。

隊長は坂本龍馬だつた。

「お、坂本さん。」

グラバは歡喜の聲を擧げて岩蔭から出て來た。

「グラバさん、怪我はありませんでしたか。」

「有難う、少しも怪我はしません、然し坂本さん、どうして此の事が分りましたか。」

「いや、實は今朝、貴下に對して不穩の計畫をする輩があるとの諜報があつたから、直ぐ様貴下の後を追つて來たのです。此奴等は幕府の方から買収された奴等ですよ。」

「私に長州へ武器を賣つたことが悪いと云つてゐました。」

「さうでせう、いや、幕府も窮した結果とは云へ、馬鹿な眞似をしたものだ。グラバさ



ん、此の分では幕府の斷末魔がいよく近付きましたぞ、ハツ／＼／＼。』  
龍馬は愉快さうに哄笑した。

(五)

正克は汲んで来た温泉の水で眼をたでゝゐた。まだ此處へ来てから三日ばかりにしかならないのに、餘程の靈泉だと見えて眼の痛みが薄らいで来た。日に幾度かあの薬師の湯へ行つて入湯し、宿へ歸つて来てはおなじ水で眼を洗つてゐる。それより外にすることもない體だ。

眼病もらくになつたが、人界を離れたやうな高山の湯治場の生活は、彼を久し振りで呑氣な氣持にならせた。

『旦那様お晝をお上りなさいませ。』  
宿の主婦が膳を持つて来た。

正克は眼をたでるのを中止して膳に向つた。主婦は前に坐つて給仕をした。

『お眼の具合はどうで御座ります。』

『おかげで、大變快くなつた、此の分なら二た週りも入湯したら全快するかも知れぬ。』  
『それは宜ろしうござりました、何しろあの薬師の湯は、行基菩薩さまがお開きなされた湯ださうで、以前は彼處にはお薬師さまのお堂がありました。が現今では毀れてしまつて何も残つて居りません、どんな眼病でも治らぬことはないといふ有難いお湯でござります。』

主婦は客の機嫌が宜いのでいろ／＼の話を聞かせた。

『眼病にもよいが、この通り涼しいので夏を忘れたやうだわい。』

『それはもう此の土地では暑さといふものは知りませぬ、然し湯治場は春秋だけで、夏はお百姓衆が忙がしいので、この通り閑でござります。けれども旦那様、廣い世間には結構な身分の人もあるもの、人の忙がしいといふ夏中宿屋を一軒借り切りにして、湯治



に來てゐるお人も御座ります。

『それは何處の人かの。』

『長崎のグラバさんといふ異人さんでございます。此の先の蔦屋といふ宿屋においで、  
ございますが、お妾さんや家來衆から料理人まで連れてゐるといふ大掛り、異人さんな  
んといふものは一體どれだけお金があるのでございませう。』

『……』

『それにあなた、お才といふラシヤメンも一緒に來て居りますが、長崎でも名代のラシ  
ヤメンだと申すことで、それは綺麗な女で御座います。旦那様も一度お才さんを御  
覧なされませ、尤も御覧なされても、ラシヤメンではどうにもならず却つてお眼の毒、  
ホホホホ、折角快くなつたお眼が又ブリ返すと大變で御座りますねえ。』

主婦は一人で面白さうに饒舌つた。

『お才が此處に來てゐる——。』

何んといふ意外なことだらう。

正克は思ひ掛けない消息を聞いて俄かに其の胸が騒ぎ出した。

お才と別れてからもう一年以上経つた。其の一年餘りの自分の地下に潜つてしまつた  
生活——。自分が今日の境遇になつた原因はと云へばお才から起きたことだ。あの時風  
頭山でお才を救はんがために異人を斬つた、あれが此の身の破滅だつた。

正克は、血氣に逸つた自身の行爲を顧みて悔恨を味はふことは屢々あつたが、さりと  
てそれがためにお才を恨んだことは一度もなかつた。異人を斬つたのはあの場の成り行  
きであつた、お才のせゐではない。

然し、お才が藤岡民彌の持物になつたと聞いた時には、眞實好い氣持がしなかつた。

それまで空想の中にだけ描いてゐたある幻影が無残にも踏み潰されて了つた。だが、

(俺はお才に對して何も要求する権利はない、お才が何をしようと思ふ女の勝手だ。)

と考へて正克は自から慰めたのだつた。然し、お才に對するよりも、寧ろ民彌に對す



る不快と憤りだけはどうしても消すことが出来なかつた。  
處が、今度お才がグラバの持物になつたことを知つた時には、そしてそれが爲に民彌が憤激の餘り腹を切つて死んだ話を聞いた時、正克は格別何んとも思はなかつた。只、それはお才といふ女が、今は全く自分と關係の無い人間になつて了つたやうな感じがしたゞけであつた。

(お才は今では俺のことなどは忘れてしまつてゐるだらう。)

正克はさう思つた。お才の變轉する生活から想像してそれは當然のことだと思つた。今では自分と縁のないお才と思つてゐたが、其のお才が、此處へ來てゐると聞くと、正克の心は大波に揺られるやうに動揺し始めた。

(お才に會つて見度い。)

然し、會つたところでどうしよう、それはまつたく無益なことだ……。

(六)

正克は手拭を提げて遙か遠い山蔭の温泉の方へ歩いて行つた。霧が晴れて陽が照つてゐるので、編笠を冠りいつものやうに刀を一本差して出掛けた。

日に何回となく通ふので路は慣れてゐた。小屋へ達すると、衣物を脱ぎ、其の上へ脇差を置いて、湯に浸つた。湯壺の廣さは一間四方位ある天然の岩窟で、其の奥の方から温泉が湧き出してゐる。他の場所から出る温泉は其の儘では手も附けられぬ熱湯だが、此處のは温泉とは名ばかり、殆んど水に等しい温度だつた。

正克は全身を湯に浸け乍ら、手拭でヒタ／＼と眼を浸してゐた。

正克の後を尾行て來た二人の男があつた。一人は四郎島の釜四郎で、もう一人の方は鳴瀧の音藏である。

『親分どうです、好い具合にいきましたね。』



「うん、今度こそ野郎を逃がすことぢやあねえ。」

「當り前でさあ、相手は眼病でろくに眼が見えねえ人間、おまけに其奴が丸裸で湯に入つてる處を、ふん縛ることが出来ねえやうなら、お前さんも十手をお官へ返したはうが宜う御座えまさあ。」

「さう云ふけれども、野郎は却々手利きだから油断は禁物だ、お前は其の棒で相手の頭でも脚でも構はず殴り付けるのだ、若しやり損じた時には、相手に抱き付いて了へ、さうすれば俺が直ぐ繩を打つからな、いゝか。」

「承知しました、然し親分も抜からずによつてお呉んなせえよ。」

「大丈夫だ。」

二人は小屋へ近付くと話しを止め、抜き足差し足で窺ひ寄つた。

入口から覗いて見ると正克は向うむきになつて湯に浸つてゐる。而も縁の岩に頭を凭れ掛けて頻りに眼をたでてゐた。

「めめた。」

釜四郎は湯壺の方へ忍び寄つた。正克は依然として眼をたでてゐる。

釜四郎は脚を踏ん張つて、五尺ばかりの棒を振り上げ、聲も掛けず、正克の脳天を目標けて打ち下した。

「あッ。」

といふ低い叫び聲はあつたが、正克は打ち碎かれたかと思ひきや、間一髪の處で身を轉した。そして棒の先を手で掴んだ。

「しまった。」

釜四郎が飛び掛るよりも早く、正克が力一杯に棒を引いたので、釜四郎は前へのめつた拍子にスベ〜した岩で足を踏み滑らせ、ドボンと湯壺の中へ落ち込んだのだつた。

「御用だッ。」

音藏は手練の捕繩を振つた。それが正克の右の手に掛つた。けれども正克は屈せず浴



槽から飛び出すと、素速く脇差を拾つて左の手で抜いた。繩は切られた。

「釜四郎々々。」

と音藏が叫んだ。

釜四郎が濡れ鼠になつて湯壺から這ひ上つて來た處を、

「エイ。」

正克が左一本で殴り付けた刃が、顎から喉へ掛けて深々と斬り込んだ。

「わあッ。」

といふ叫び聲を残して、釜四郎は再び湯壺の中へ落ち込んで行つた。

「汝も。」

裸體に血を浴びた正克が、音藏に迫ると、音藏は恐れて身を翻へして小屋を飛び出して逃げて行つた。

正克は追ひもせず立つてゐた。

釜四郎の死骸は、眞つ赤に染つた湯壺の中に浮き上つた。

正克は人を殺したことは苦にならなかつたが、折角の靈泉を穢したからもう自分の眼病は治らないだらう——と考へた。

(七)

正克は釜四郎の死骸を引き上げて、其の近くにある火を噴いてゐる地獄の口へ抛り込んで歸つて來た。

氣のせぬか、眼が痛み出したやうだ。

手拭で押へ乍ら歩いて來ると、

「まア、河野様。」

と不意へ呼び掛けられた。片方の眼で見ると、それはお才だつた。

正克は無言で見返した。右の眼を濡れた手拭で押へたまゝで。



『正克様、貴郎はいつ此處へお出でなされました。』

『つい三四日前に参つた。』

『お眼が悪いのでございますか。』

正克は肯いた。

『あの薬師の湯とやらへお入りなされてゐたのは貴郎でございましたか。』

お才は驚きとも、喜びとも、形容の出来ない氣持で、只胸がワク／＼鳴るばかりだ。

(到頭逢へた。)

それは永い間どんなに熱望したことであつたらうか……。

お才が、ポツとなつて、夢を見てゐるやうな氣持でゐた時、正克は悄然としてはゐるが、然しハツキリした聲で、

『お才、さらば。』

と云つて、サツサと歩き出した。

『あ、正克様。』

お才は追ひ絶つた。彼女は初めて自分の立場を反省した。

(正克様は憤つてゐるのだ。)

それを考へなかつた自分の愚かしさ、手前勝手さをひどく恥かしく思つた。

(わたしは此の人の前へ出られる身分ではなかつた。)

と思ふと、穴へでも入り度いやうな氣持がした。たとへどのやうなことがあらうとも正克にめぐり逢ふ迄自分の身を淨く保つてゐなかつたことが後悔された。昔の儘のお才であつたなら、正克も優しい言葉を掛けて呉れたに相違ない。けれども、現在の此の身は……。

お才は云ひやうのない悲みに打たれた。思はず正克の後を追つて行かうとした足が大

地へ釘付けになつて了つた。  
正克は振り返りもせず、硫黄の流れてゐる地獄畑の傍らをトボ／＼と歩いて行く。